

縄文時代後期加曾利B式土器の研究(Ⅰ)

——最近の成果の検討と新たなる分析——

大 塚 達 朗

序

近年に於ける膨大な調査件数及びそれに帰因する発掘資料の量的増加は、必然的に研究の目的・方向・方針・方法等々の在り方、つまり研究の質・内容を問うている。縄文式土器研究に於いても然りである。

今、仮に加曾利B式土器研究を念頭に置いた場合、最近相前後して安孫子昭二氏と鈴木正博氏によって意欲的かつ総合的な論文・著作¹⁾が刊行されているのが注目される。

ところで、この加曾利B式とは、1924年に調査された千葉県加曾利貝塚²⁾のB地点貝塚出土の土器を標準として山内清男氏によって型式設定され³⁾、「その区分が最も細くなる程、その変遷の詳細(縄紋土器文化の——引用者註)を明にし得るであろう⁴⁾」との立場から「型式は益々細分され、究極まで推し進むべきである⁵⁾」という先史考古学的方法把持と、「縄紋土器文化の真相」という原理的解明⁶⁾とを背景とした縄文式土器の型式編年研究という山内氏の一貫した研究の中で、1939年に「古い部分、中位の部分、新しい部分」と三つに分けられ⁷⁾、その後も多数の貝塚・包蔵地出土の資料の吟味を経て、加曾利B1・2・3式と明確になった土器型式である⁸⁾。

しかしながら、残念なことに、山内清男氏自身が具体的に提示した土器が、加曾利B式という多数の器種、範型、形態や様々な文様をもつ土器を理解・研究するには、量的に少なかったこと、B3式については標準資料の提示の機会に恵まれず概念的説明を知るのみであったことから、以後の研究者の憶測に委ねられている部分が多いというのが実情である。従って研究者間の理解に齟齬を見い出すのは容易である。

従来から言われているように、加曾利B式期、西部関東、例えば神奈川や東京の一部では各種配石遺構を多く輩出する⁹⁾一方、東部関東、霞ヶ浦沿岸には数多くの該期の貝塚が形成され、印旛沼・手賀沼周辺には貝塚や「土器塚」が存在している。それらの事象の編年的位置付けは重要なことであり、そのために加曾利B式の型式理解を深化させる必要がある。また、土器型式が直接示唆し得る社会的諸関係の認識も、これら考古学的事象の理解とも絡んで重要である。

今略述した加曾利B式土器研究の意義に鑑み、筆者なりに加曾利B式土器の研究を進行せしめて行く間、安孫子昭二氏と鈴木正博氏の論攷から有益な見解については参考としつつも、納得し得な

い主張にも遭遇してしまった。自己の研鑽の筋道に照らして、それらの疑問についてまず整理しておくのが第一義と考えるに到り、本稿を草する次第である。

具体的には、西部関東の土器群を分析の中心に置いた安孫子昭二氏の編年案と、東部関東の土器群の分析を自己の編年案の基本にすえた鈴木正博氏の見解について、両者に共通する認識、あるいは、相反する意見について整理し、それらが山内清男氏の説く加曾利B式の型式内容とどのように連関し発展させているのか否かを論じるのを目的としている。それらが共通した認識の下でのより西部関東の土器を主体にした細分案で、もう一方がより東部関東の土器を主にしたそれであるならば、非常に好ましい筈である。何故ならば、土器型式は時期的細分のみならず、地域的にも細別されていなければならないからであるが、果たしてそうなのか。山内氏の見解を追認している部分とは別に、異なる解釈・考え方を提出している点についてその意義を探ってみることにする。

1. 『日本先史土器図譜』をめぐって

まず、加曾利B式の典拠たる『日本先史土器図譜』の該当する内容について触れてみたい¹⁰⁾。

現存する千葉県加曾利B地点貝塚の資料を観察してみると、ほぼ加曾利B式全般に亘っているのに気がつく。すなわち、「古い部分」、「中位の部分」、「新しい部分」のいずれかに該当する資料のようである。そのことは、山内清男氏が加曾利B式の設定の経過、編年的位置を説明した後に関東地方全体の土器型式の順序を概括した際、「尤もこの各階段には二三の型式が細別され得る場合がある¹¹⁾」と述べていることに照応するのであろう。加曾利B式という型式の認識と同時に細分を考えていたのも資料的に必然的な仕事であったと思われる。『日本先史土器図譜』の加曾利B式の細分内容の提示は、その細分作業の一応の帰結であろう。

現在で言う加曾利B1式に相当するものとして図版I～IIのような土器群があげられている。これらの土器はほぼ関東の三つの地域から選ばれていることがわかる。図版I—1・3は恐らく、相模や南武蔵方面を念頭に置いていたのであろうし、図版I—2は下総方面を念頭に置き、図版I—4～6、図版IIは霞ヶ浦沿岸、常総台地という地域を想定してのことであろう。

その後、山内清男氏が、B1式として解説を加えた注口付土器と双口土器(図14—4)は前者が福田貝塚出土であり、後者は陸平貝塚出土の土器である¹²⁾。ともに茨城県の貝塚の土器である。つまり、山内氏がB1式と扱っている土器標本は茨城方面の土器がもっとも多いことがわかる。加曾利B1式の型式内容の充実にあたって、茨城方面を中心に探索の手を広げていたのであろう。そのことは、「土器によって年代の階段を作るには先づ、一遺跡、一地点又は一地点に於ける異った遺物層から発掘された土器を一つの資料として、甚だ多数の資料を観察し、吟味することが必要である¹³⁾」とし、その上に「資料を求める諸遺跡は広くない範囲から選ぶべきである。余り広い地域を取扱うと地方差が入って来る恐れがあるからである¹⁴⁾」との方法的理解によるのであろう。土器型式の細分に際し、常に留意しなければならない点である。さらに言えば、各細分型式に於いて中心とは常に一定というのではない。そのことと関連して、山内氏が加曾利B2式の「全体の構成を示

すことが出来なかった」と言いながらも、「この式的良好なる資料として」、「共に下総国印旛郡臼井村にある」遠部台と江原台遺跡の土器を選んだこと¹⁵⁾を想起する必要があるだろう。

ところで、加曾利B1・B2・B3式が設定されていく過程は、山内氏の言を借りるならば、「例えば資料AとBは同じ型態及び装飾をふくみ、全く同一の組成を持って居る。資料PCLは相互に同一の組成を持って居るがABとは違う。資料HMは又特異な存在だという様になる。この場合ABは一型式、PCLは一型式、HMがも亦一つの土器型式を意味することになる。これらの型式の内容を決定し、適当な名前を付ける。斯くして出来た型式は一定の内容を持ち、一遺物層、一地点又は一遺跡から純粹にそればかり出で、他の型式とは内容を異にし、遺物層、地点又は遺跡を異にして発見されることになるのである。これらの型式は即ち短時日に残された土器の一群を意味し、年代の変遷の一階段に相当する訳である¹⁶⁾」と、型式設定の手続きと型式の意味の把握から、「各型式の年代順は斯様な層位的重畳によって漸次確定する¹⁷⁾」が、「層位による年代順が完備しない場合、型式の内容の比較によって変遷の順序を推定し、仮に型式の年代的位置を定めることも出来ない訳ではない¹⁸⁾」と両様の方法を採用・組み合わせて行く過程であって、決して便法(「土器形式の内容の正しい識別、及び層位による序列を考慮しない形式学¹⁹⁾」)に頼るものではない。

さらに注意すべきは「型式の年代順の途中に、前後連続しない部分があることがある。これは文化が一旦切れたと解すべきである。しかし、中間に入る型式が未だ発見されず、それがため前後続き具合が悪い場合が屢々ある。それ故型式が皆指摘されたか否かを確かめることが大切である²⁰⁾」との点である。そこで、「極限まで推し進むべき」である「細分」作業は、一方で連続性の確認であり、一方でその型式の連続性の中でのより同質なまとまりを時空間的に認定していかなければならない作業である。

さて、B2式の基本とすべき内容としては、器種について「皿、浅鉢、深鉢、注口付土器、壺形土器等の変化」があり、各形態について「皿、浅鉢では平底の他に丸底を有するもの、台を有するものを見懸ける。深鉢形には器形の差が多いが、底の甚だ小なものは少く、中には体下半筒形を呈し、比較的大きな底を有するものもある。口縁は平なものが多いが、波状の大きな突起を有するものが目立ち、堀之内式以来の小突起が少くなって居る」と概括されている。文様では「体部の装飾としては磨消縄紋があるが、並行線化したものは少くなり、性質が変わって来る。他に斜線を加えた特有の文様帯が一つの特徴をなして居る」との指摘がなされている²¹⁾。図譜では実際に図示されているのはこの斜線文帯をもつ土器群である。

その後、山内氏は台付皿形土器である福田貝塚例(図1-1)と同時代のものとして、千葉県姥山貝塚出土の胴部に磨消縄文をもつ平口縁深鉢形土器や余山貝塚出土の横帯文をもつ鉢形土器に言及している²²⁾。筆者は福田貝塚例(図1-1)に対応する同趣の波状口縁を有する深鉢形土器として図1-4のやはり福田貝塚出土の土器を考えている²³⁾。正に「体部の装飾として磨消縄紋」があり、「比較的大きな底」を有している点が説得的ではないかと思っている。

ところで、加曾利B2式の「全体の構成」を知る上で手がかりとなるのは、ちょうど今から十年

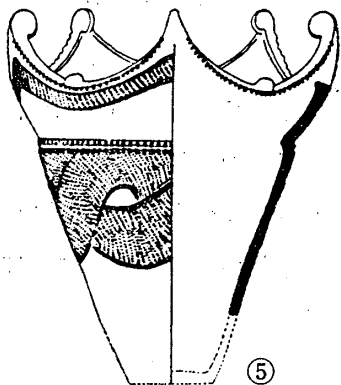
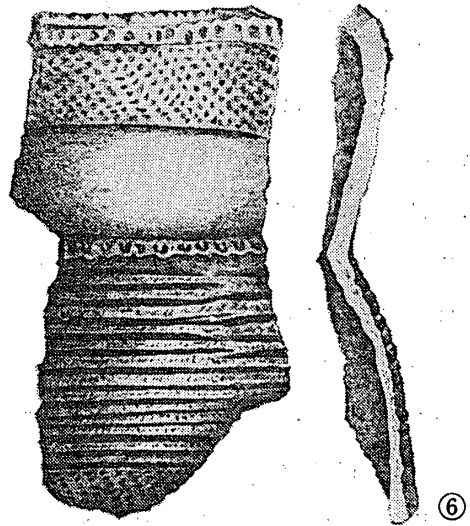
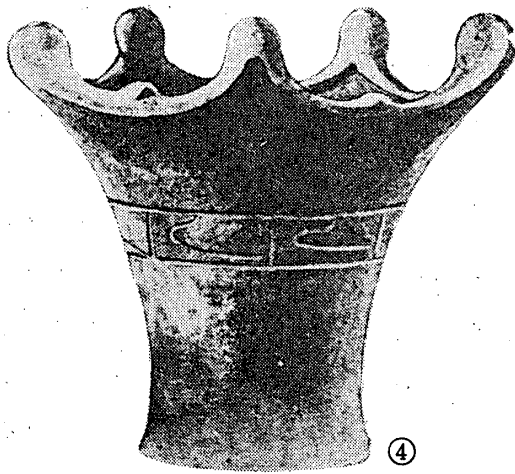
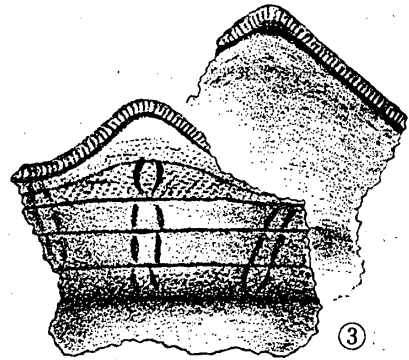
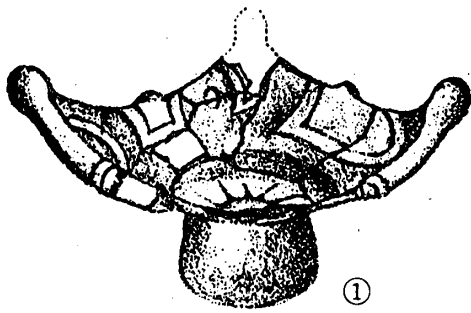
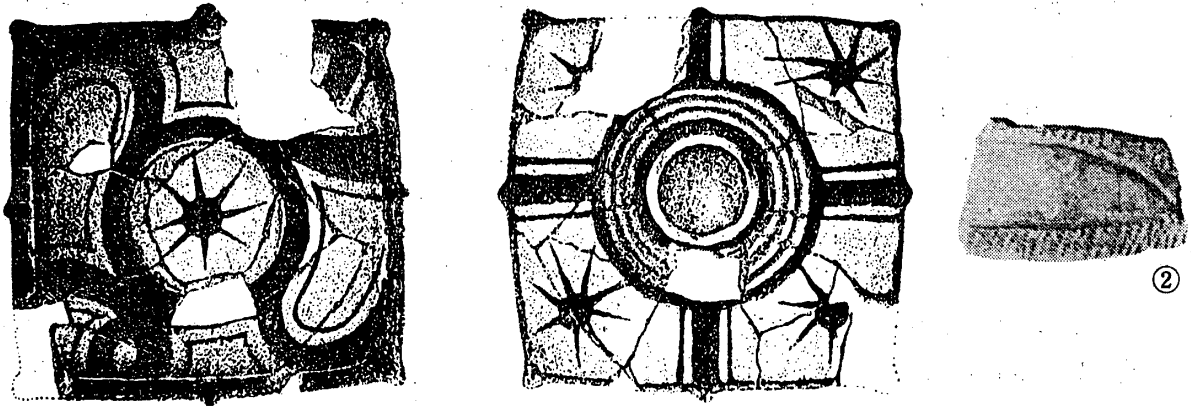


図1
1-4: 福田貝塚, 2: 遠部台, 3-6: 大森貝塚,
5: 江原台 (縮尺不同)

縄文時代後期加曾利B式土器の研究 (I)

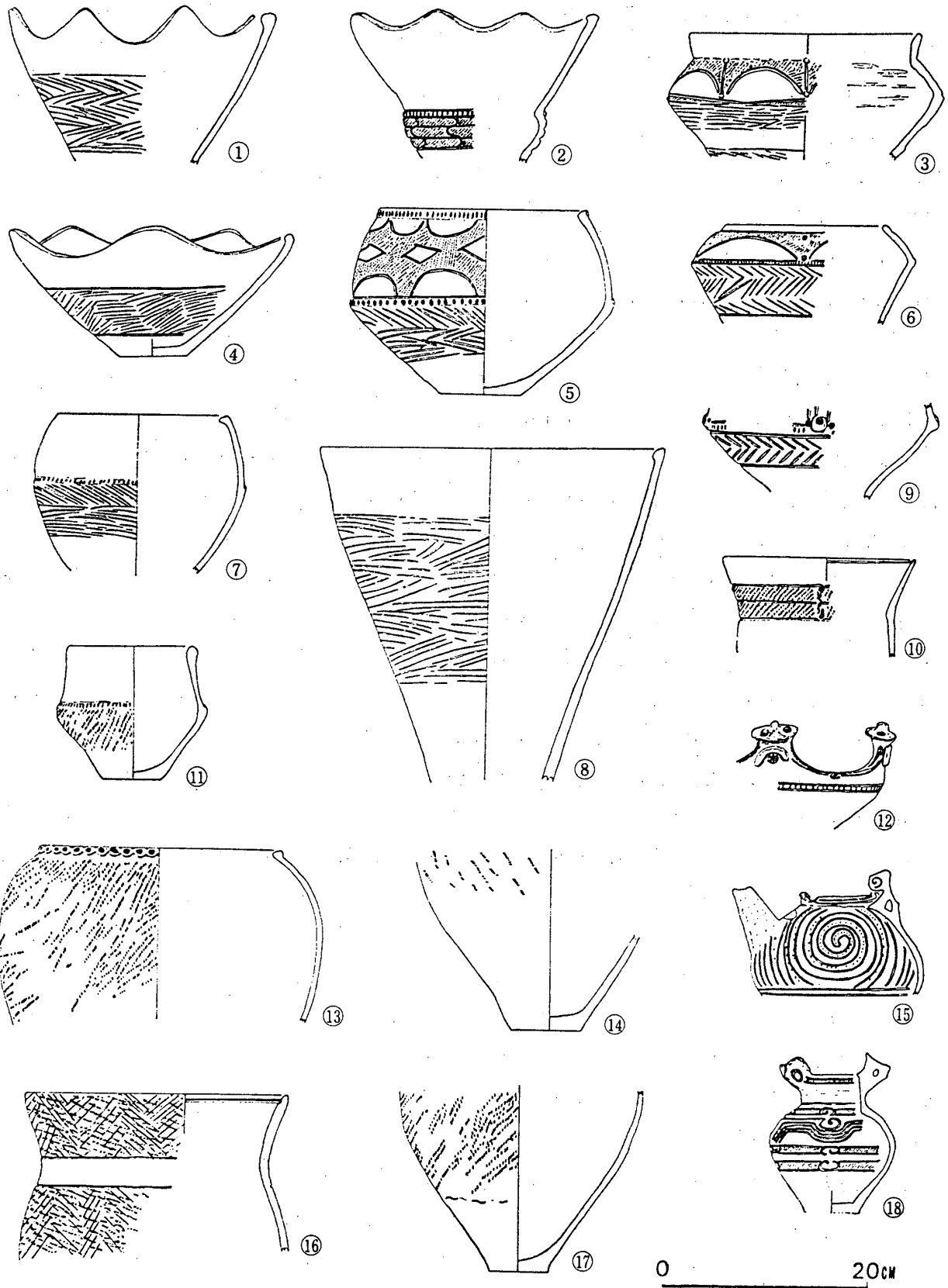


図2 千葉県松戸市二ツ木後田貝塚出土土器

前に報告された千葉県松戸市二ツ木後田貝塚出土の土器群であろう²⁴⁾。図2—15・18の注口付土器を除いた土器がほぼB2式に相当するであろうと考えている。

図2—1・4～5・7～8は『日本先史土器図譜』でいう「斜線を加えた特有の文様帯が一つの特徴をなして居る」土器である。同図1～2・4は「波状の大きな突起を有する」例であり、同図2・10は胴部文様が「並行線化」した例であって、B1式からみて「性質が違って来る」のである。同図3・5～6に見られる磨消縄文はこの時期に発達を見るものである。

同図3・6・9は、大森貝塚から多くの出土を見たB2式土器である²⁵⁾。体部がソロバン玉状に張り出すのが特徴である。体部上半には、磨消連弧文（同図3・6）があり、下半には綾杉状沈線文（同図6）や羽状沈線文（同図9）がある。同図3の体部文様はやや地域的変容がみられる。

これらの資料からわかるように、大森貝塚で著名なソロバン状の体部をもつ土器と斜線文帯をもつ土器との平行関係は明確であろう。山内清男氏があげているB2式の江原台の一例²⁶⁾（『日本先史土器図譜』図版39—2）の羽状沈線文は図2—9と同じである。また、遠部台遺跡関係の古い報告では、第二類とされているB2式斜線文帯をもつ土器に伴う第五類の磨消縄文の中には図2—3・6に相当する磨消弧線文（図1—2）があるのも²⁷⁾、それらの関係を物語っている。

図2—12は波状の浅鉢形土器であろうが、頂部にある「小突起」は説明で「少くなって居る」類に通じるものであろう。これについては後で触れることがある。

図2—13・16は同図にある斜線文を有するB2式に伴う粗製土器二態である。この精製と粗製の組み合わせは、西部関東に於いてもそのままのセットで進出している場合を多くみる。一方、図2—3・6・9のようなソロバン玉状に張り出す体部をもつB2式の土器は本質地を離れる場合、本来的に伴う粗製土器（大森貝塚に好例がある）とのセットでの分布を示すことはないようである。後田貝塚のような在り方が典型である。また、分布の中心如何を問わず、ソロバン玉状の体部をもつB2式土器はその体部に遠部台に代表されるB2式の斜沈線文帯からの大きな影響を示す場合がある。図2—3はその一例である。

公津原 Loc. 39 の26号住居址²⁸⁾出土の資料（図3）も、床面一括ではないが、ほぼB2式の内容を示すものではないかと思う。2の土器は地文縄文上に羽状沈線文をもっているようである。これらの資料の場合、磨消縄文をもつ土器が色々ある点に興味はひかれる。遠部台遺跡では各種の磨消縄文をB2式が伴っているのであるが、26号住居址の資料もその一端を示しているものと考えている（磨消縄文と言うのは充填縄文も含めた広い意味で用いている）。器種・器形、及び文様構成がわかることで重要であろう。

新しい部分（B3式）については、「丸底の皿、深鉢形が著明となり、深鉢形には頸の分立した底の小形のものが多くなる。装飾も異って来て、磨消縄紋は帯状又は弧線を中心としたものを主とするに至る²⁹⁾」と、結局、概念的に学ぶしかないのであるが、先にあげた福田貝塚のB2式例との関連で考えるならば、千葉県江原台遺跡の波状口縁をもつ深鉢形土器（図1—5）をB3式の一基準として考えていいのではないかと考えている³⁰⁾。この土器は福田貝塚例と似たような波状口縁を

縄文時代後期加曾利B式土器の研究 (I)

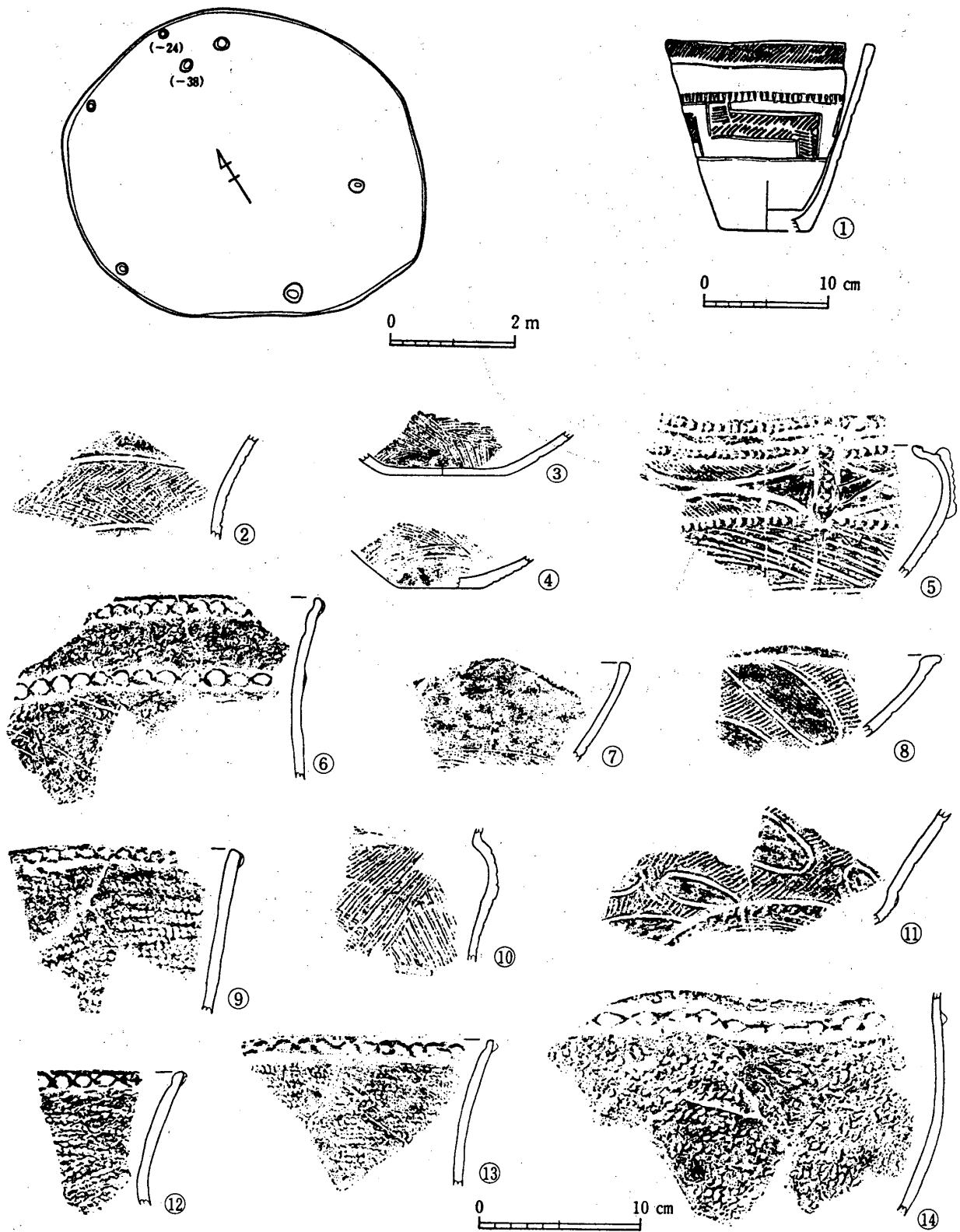


図3 千葉県成田市Loc.39(八代王作)遺跡26号住居址出土遺物

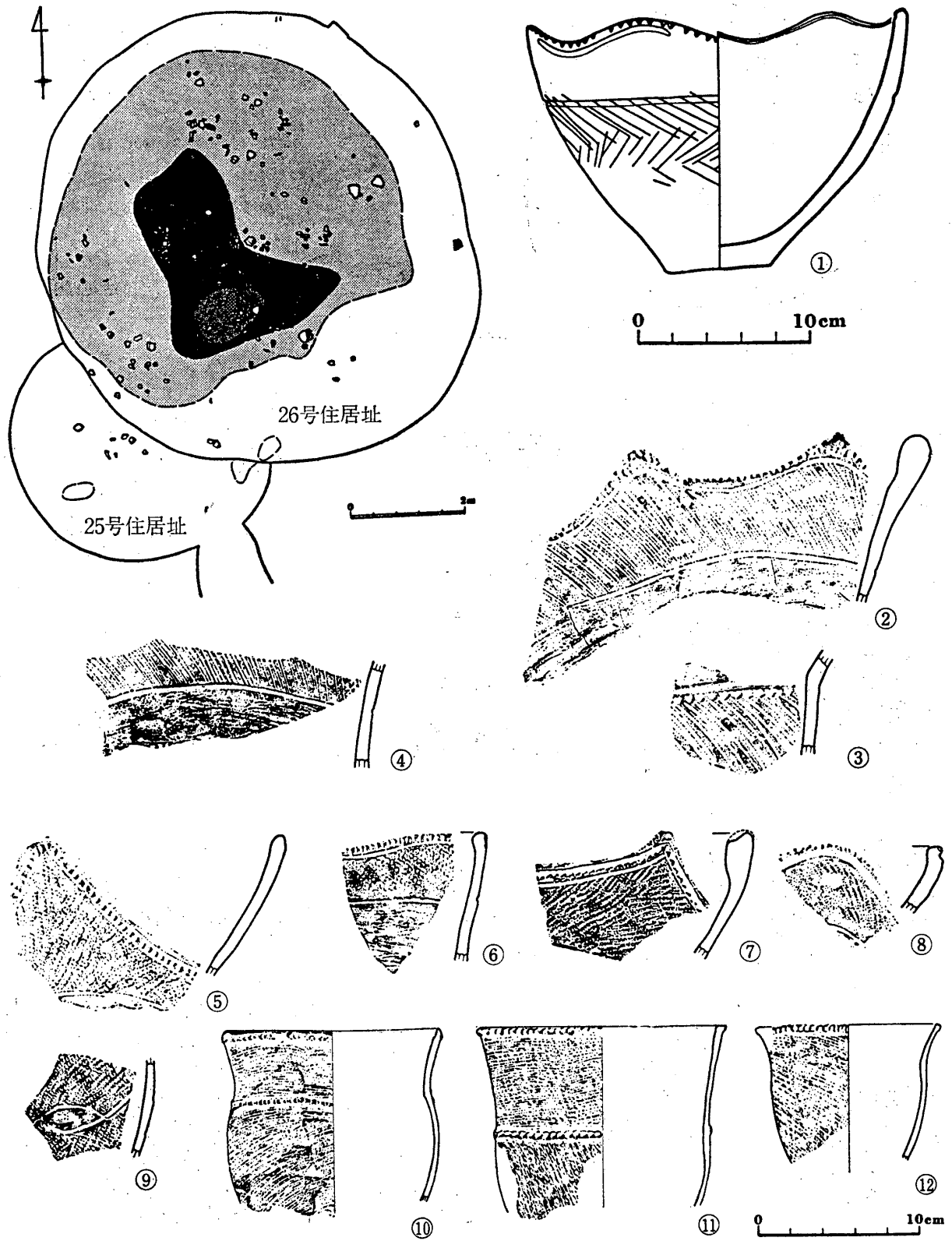


图4 千葉県市原市西広貝塚25号・26号住居址出土遺物

呈するが、口唇部に刻文帯と直下に帯状の縄文帯という口縁部文様帯と頸部文様帯をもち、くびれ部には2段の刻文帯をもっており、その下の胴部文様帯にはタスキ掛け状の入組み文を配して、「底の小形」な点も福田貝塚例とは大きく異なる。

西広貝塚にも加曾利B2式からB3式への変化を考えるのに参考となる資料がある。西広貝塚には重複している住居址がある³¹⁾。25号、26号住居址（図4参照）がそれである。図4—1は25号住居址出土のB2式土器である。胴部には綾杉状沈線文をもち、口唇部には刻文をもつが、その直下に沈線を加えられている部分がある。本来この種の土器には、口唇部には刻文をもつ場合があるが、口縁部文様帯はないのである。25号住の土器はその点でいささか時期的変容をきたしている様相を示すであろう。それより新しい26号住居址の土器（図4—2～4）は、25号住居址土器（図4—1）と同系列の土器である。この土器は口唇部に刻文帯を、その直下の沈線区画に斜条線をもち、図4—3のように胴部にも斜条線文をもち、口縁部文様帯、頸部文様帯が登場しているのがわかる。その点では、江原台の例（図1—5）の文様帯と共通している。他の例（図4—5～9）などはやはり波状口縁をもつ深鉢形土器であるが、これは江原台例のように磨消縄文による頸部・胴部文様帯をもつ土器であろう。要するに、26号住居址にはB3式のまとまりを示す土器があるのである。図4—10～12はB3式の粗製土器である。斜条線が多用されていて、B2式の粗製土器との相違がわかる。

西広貝塚と同様のまとまりを示すのが、茨城県広畑貝塚の第一文化層の土器であろう³²⁾。広畑貝塚の土器で特徴的なことは、胴部に「櫛目紋」をもつことであるが、口縁部の刻文帯や直下の帯状文を配する文様帯の在り方は西広貝塚26号住例と共通する。広畑貝塚には他に口縁部文様帯としての刻文帯を2段もつ例があるが、大森貝塚の土器（図1—6）から判断すると³³⁾、2段の刻文帯をもつ土器も胴部に「櫛目紋」をもっており、広畑貝塚の第1文化層の波状口縁深鉢形土器を一括してB3式として扱うべきであることがわかる。

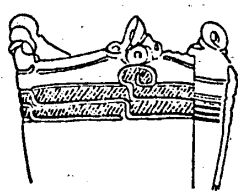
以上は筆者が山内氏の見解から判断したB3式の一端であるが、B3式についてはB1・B2式の正しい認識を踏えた上で我々の側でより具体的に型式内容を確定して行く責務であろう。

一応これで『日本先史土器図譜』における加曾利B式をめぐる筆者なりの把握、認識について略述した。これを踏えて以下の検討に移ろう。

2. 安孫子昭二氏の場合

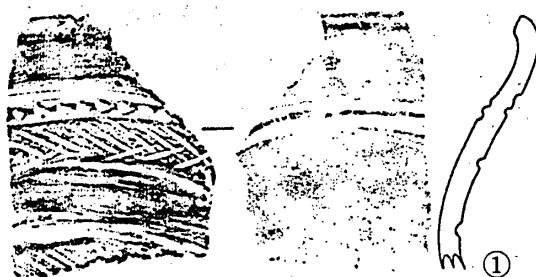
安孫子昭二氏の編年案は論文「加曾利B式とその細分」と付される土器実測図を駆使した変遷図及び「土器解説」に尽きる³⁴⁾。加曾利B式という多種多様な土器群について、それぞれの器種の占める位置を明示したものとして、労作であろう。

氏の細分案は三単位の突起を有する精製の深鉢形土器を加曾利B式での「標準的な型式」とし、この器種の器形、把手、文様等の細い変遷の認定と他器種との同伴関係を考えていくことで構成されているのである。この方針は安孫子氏に於いては東京都平尾 No.9 遺跡での加曾利B式の分析以

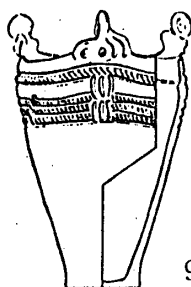


II段階

8下北原

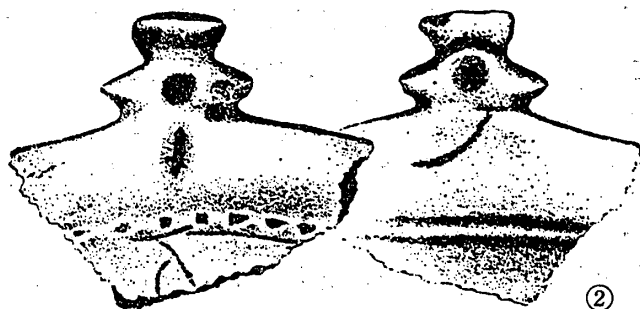


①

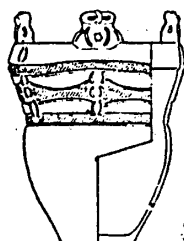


III段階

9西ヶ原

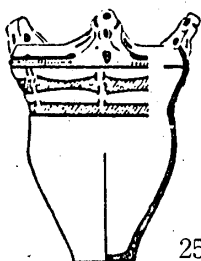


②



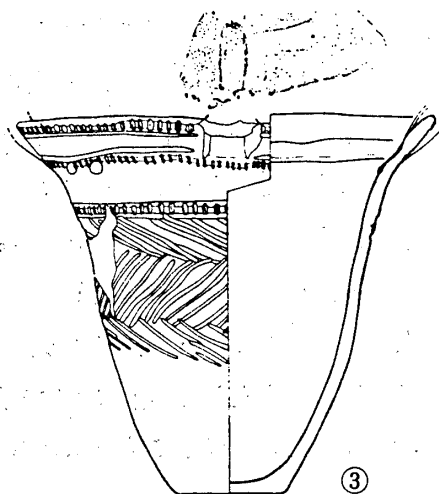
IV段階

24大谷場

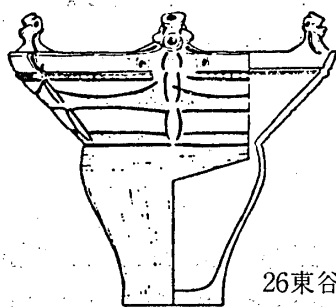


V段階

25小仙塚



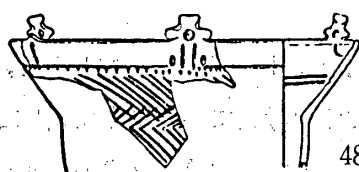
③



VI段階

26東谷

1~2: 大森貝塚, 3: 西広貝塚
(縮尺不同)



VII段階

48平尾9

図5 安孫子昭三氏の編年案の骨子と関連資料

来一貫しているものである³⁵⁾。古くは坪井正五郎、沼田頼輔両氏の研究³⁶⁾に連なるものでもあるが、土器型式の細分という視座での分析は、安孫子氏に於いて始めて体系的になったのである。

安孫子氏の場合、三単位の突起を有する深鉢形土器が堀之内2式からきわめて連続的に変化していると考え、その変化の階梯をI（堀之内2式）～X（曾谷式）段階に分け、その変遷で二つの画期を見い出している。一つは、図5—24にみられるような胴部がくびれその下半が張り出す器形になる段階であり、もう一つは頸部の文様帯がなくなり体部に綾杉状沈線文のみが施され、把手も平板化するなどの変化がある段階（図5—48）である。これらの土器を基準にして、加曾利B1、B2、B3式が弁別されている。しかしながら、B1式以降とされる土器（図5—24以降）と他器種との良好な共伴関係を示す一括資料、単一文化層、単一型式の遺跡等の指摘、あるいは他器種との並存の可能性の吟味については、必ずしも納得のいく説明はなされていないように思える。この点は平尾遺跡の加曾利B式の分析のときに問題にしていた筈である³⁷⁾。

もう少し三単位の突起を有する深鉢形土器の変遷について、安孫子氏の見解を追って行くと、「土器解説」ではB1式に於ける該種の変遷はもう少し細分して考えているようである。氏の場合、『日本先史土器図譜』で取り上げられている茨城県椎塚貝塚例（図版I—5）を加曾利B1式の最初の段階に位置づけている³⁸⁾。根拠として堀之内2式の同県安食平貝塚例の突起の形態との類似などをあげているが、これには疑問を抱かざるを得ない。安食平貝塚例が堀之内2式の終末とは筆者には考えられないので、この土器と椎塚貝塚例との突起に於ける類似を指摘し得ても、型式学上の根拠とはなり得ないのではなかろうか。比較すべきは堀之内2式終末段階の同形式の土器であるべきで、例えば神奈川県下北原14号住居址出土の土器群³⁹⁾の突起を見ていくなれば、安食平貝塚例のような堀之内2式と椎塚貝塚例のような加曾利B1式との間には別の変化の階梯があると考えべきであり、堀之内2式の突起から加曾利B1式の突起へスムーズに移行するものではないであろう。従って、椎塚例がB1式の突起をもつ深鉢形土器の最初の段階とは考えられないのである。また、B1式終末からB2式初頭について主文様にギャップがありすぎるように思えてならない。B1式終末の認識にも異論があるが、これについては後述する。

図5—48の平尾No.9遺跡の土器に、「胴上部文様帯が廃れ、体部全体が矢羽根状文で被われるようになる」という画期を求め得る変化があると安孫子氏は主張するが⁴⁰⁾、筆者は大森貝塚例⁴¹⁾（図5—2）を、この平尾No.9例と平行する時期の頸部文様帯に弧線文をもつ土器ではないかと考えている。大森貝塚例の突起は埼玉県東谷例（図5—26）のような肩部の盛り上りも頂部の凹みもみられず、この点は平尾例のそれに近い。東谷例の口縁部が一度やや屈曲しながら外反しているのに対し、大森貝塚例はそのような屈曲も弱く、従って後出的な様相を有すると判断できる。と言うことは、平尾例と同一段階に属すると見た方がよいであろう。逆に、大森貝塚資料⁴²⁾から判断すると、頸部に羽状沈線文をもつ土器（図5—1）が東谷例にも平行すると考えた方がよいであろう。別の例からすると、大森貝塚例（図5—1）は東谷例と全く同趣の突起をもつようである。

この器種・形式の変遷の中で画期を見い出すならば、筆者は西広貝塚例⁴³⁾（図5—3）がより相

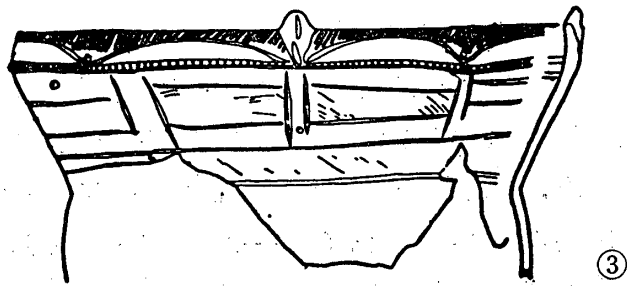
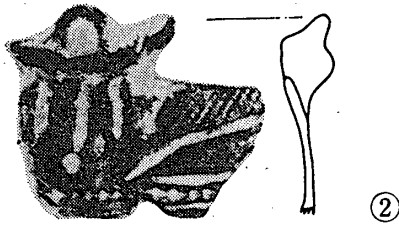
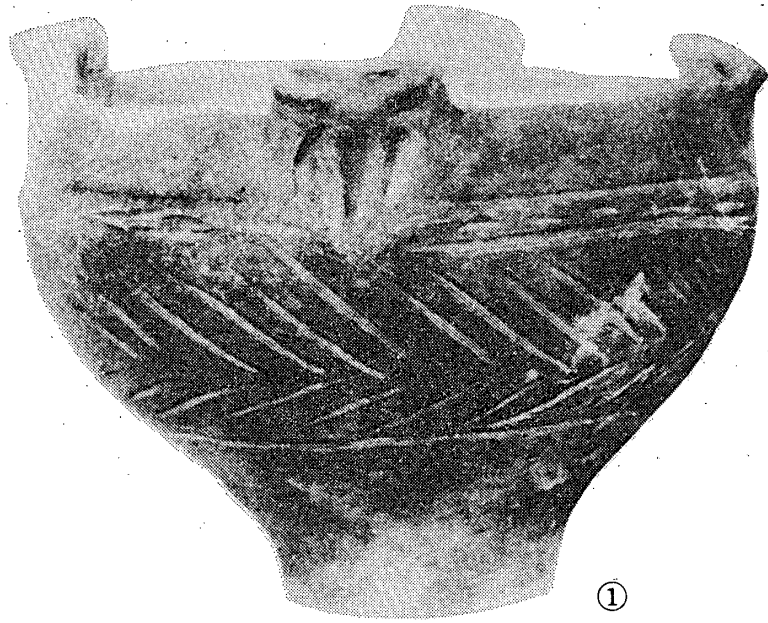


图6 1: 権現台, 2: 大磯小学校, 3: 豊沢具塚 (縮尺不同)

応しいのではないかと考えている。この土器は、口縁部内側の様相及び口唇部の破損具合から観察して、ある種の突起をもつことは問題なく、その意味で安孫子氏によって細かい変遷が取り上げられてきた深鉢形土器の系列に属するものである。

この深鉢形土器の体部には平尾 No.9 例や東谷例のような明確なくびれ部がなくなっている上に、口唇部には沈線で区画して中に刻文を充填し、胴部にも二本沈線で区画した中に刻文を充填して、その直下に綾杉状沈線文をもつ土器である。明らかに型式学的に見て、平尾 No.9 例より後出的である。西広貝塚のこの土器が出土した地点には加曾利 B 3 式土器が伴っているのは見逃せない⁴⁴⁾。口唇部と胴部の刻文帯は B 3 式期の手法と考えている。この西広貝塚出土土器は B 3 式の所産と考えざるを得ない。平尾 No.9 例は B 2 式の終末の可能性があるのではないかと思う。何故ならば、別地域の土器との対比を考えるならば、体部文様の類似から、西広貝塚25号住居址の土器(図4-1)があげられるであろうと考えているからである。

では、体部に明確なくびれ部を有する他の土器(図5-24~25)についてはどう考えるべきであろうか。ここでは、B 2 式の羽状沈線文や磨消弧線文をもつ土器との型式学的な比較から検討してみたい。

図5-24~25の突起は、正面から見てほぼ左右対称な形状を呈している。このような左右対称な突起をもつ別器種の土器に、例えば、東京都権現台の土器⁴⁵⁾(図6-1)や神奈川県大磯小学校出土の土器⁴⁶⁾(図6-2)がある。前者は B 2 式の羽状沈線文をもつ鉢形土器であり、後者も B 2 式の磨消弧線文をもつ鉢形土器である。これら B 2 式土器の突起と図5-24~26段階の突起と明確な時期的前後関係を全例について論じることは難しいと思うが、少なくとも権現台例や大磯小学校例の突起の形態は東谷例(図5-26)よりも古いと考えている。また、東京都豊沢貝塚出土の土器⁴⁷⁾(図6-3)は口縁部に B 2 式の磨消弧線文を施文しているが、本来ならば口唇部に左右対称な突起をもつ器種の土器であろう。器形的にはこの土器も東谷例より古相を示していると思う。少なくとも大磯小学校例、豊沢貝塚例、権現台例などはいずれも東谷例よりも古い段階に対比すべきことが言えるであろう。その上で、権現台例と大谷場・小仙塚例(図5-24~26)を比較した場合、権現台例が最も古相の突起をもつ土器であろう。

従って、以上のような他の加曾利 B 2 式土器の対比から見て、安孫子氏が、突起をもち胴部がくびれる深鉢形土器(図5-24~26)が B 2 式であると言うことは、大旨従うべきであろう。突起を有する深鉢形土器自体の安孫子氏の編年観には原則的には賛成すべきであろう。しかし、文様については、この種の土器の変遷中にも弧線文と羽状沈線文が併存する段階があると考えべきものと思う。さらに、氏も認めるように、この種の土器はある段階から東部関東の貝塚地帯からはめったに見られなくなるのであるから、これを関東の編年のメルクマールとするという点には納得できない。

安孫子氏と筆者で理解を大きく異にする土器がある。それは、大森貝塚で著名な体部がソロバン玉状に張り出す器形を有する B 2 式土器の変遷観である。氏によれば「最初最大径がかなり上にあり、大型であったが、その後 B 3 式になると、しだいに肩の張りがゆるみながら鉢形化し、直立す

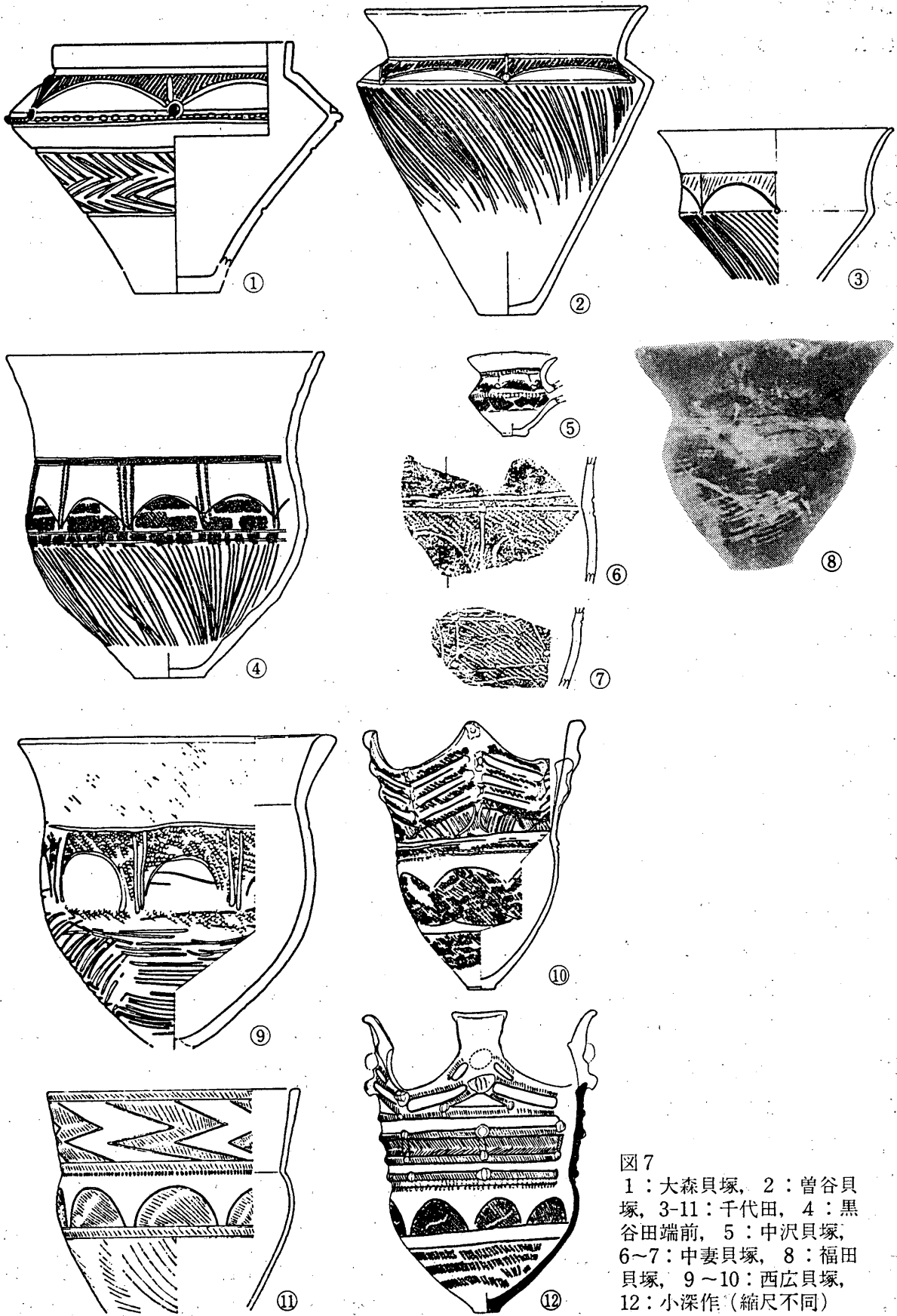


図7
 1：大森貝塚，2：曾谷貝塚，3-11：千代田，4：黒谷田端前，5：中沢貝塚，6-7：中妻貝塚，8：福田貝塚，9-10：西広貝塚，12：小深作（縮尺不同）

る口縁部もなくなる⁴⁸⁾」とのことであるが、恐らく、編年表からみて、千葉県八祖遺跡⁴⁹⁾出土土器の様相を普遍的な在り方と捉えたからであろうが、八祖遺跡例以外の土器を集成していくと別の解釈が要求されるであろう。図7—1は著名な大森貝塚の例⁵⁰⁾であり、もう一例(図7—2)はやはり有名な千葉県曾谷貝塚の土器⁵¹⁾である。前者は張り出し部下半の狭い横帯区画の中に綾杉状沈線を配しているが、後者ではほぼ縦に条線を施している。体部下半から底部にかけてややふくらみ気味である点も異なる。図7—3の千葉県千代田遺跡の例⁵²⁾でも、張り出し部下半から底部にかけて条線をもっている。この土器の場合は、張り出し部より口縁部にかけての器形にも大森例との相違がある。各地の遺跡を通覧した場合、大森貝塚の土器の如き文様をもつ土器が出土するところでは曾谷や千代田のような体部下半の文様をもつ土器は伴わない場合が多いように見える。

曾谷貝塚や千代田遺跡の土器は型式学的に後出の様相を示す土器で、八祖遺跡例と同様にB3式ではなかろうか。もっとも、磨消弧線文自体は大森貝塚の土器と区別しがたいのである。

このような磨消弧線文とソロバン玉状の器形を有する土器の変容と関連して重要なのが西広貝塚No. 204大形ピット出土の一括資料である⁵³⁾。波状口縁深鉢形土器(図7—10)から見て、安行1式の中段階⁵⁴⁾のセットの一端を示してくれているのであろう。ここに伴う土器(図7—9)が、加曾利B2式の磨消弧線文とソロバン玉状の体部をもつ系統の土器の変遷過程の長さを如実に示している。丸い体部をもち、くびれ部から口縁部が大きく外反し、体部上半に磨消弧線文をもち、下半には安行式期特有の弧状の条線文をもつ。この弧線文の連結部付近には先端に刺突のない二本の縦沈線をもつだけである。この磨消弧線文の直下の帯縄文は隆起手法によらないが、縄文は伴出例とともに安行式期通有のものである。この土器も安行1式と考えねばならぬ。勿論、安行1式古段階のセットにも登場している⁵⁵⁾。

丸い体部がほぼ完成し、かつ、磨消弧線文の連結部に刺突を伴う縦沈線を一本配するという伝統的な構成を保持している例として、福田貝塚⁵⁶⁾例がある(図7—8)。口縁部はやはり大きく外反している。器形的には、この土器は、曾谷貝塚例(図7—2)や千代田例(図7—3)と西広貝塚例との中間的な位置を示している。同趣例としては恐らく中妻貝塚の土器⁵⁷⁾(図7—6)があげられるであろう。この土器では、くびれ部に横走する二本沈線が見られるが、福田例にも見られ、また、両者とも弧線文の連結部に加える一本の縦沈線の上端にも刺突を伴っているが、それはB2式(図2—3)にすでにあるが、そのB2式にはくびれ部に横走する二本沈線はなく、丸い体部をもっていない。丸みを帯びた器形が新しいことがよくわかる。他の中妻貝塚例(図7—7)では弧線文の連結部間には両端に刺突をもつ二本の縦沈線が加えられ、磨消縄文手法はない。この二本の縦沈線は福田貝塚、中妻貝塚例(図7—6・8)より後出で、西広貝塚例よりは古相を示すのではなかろうか。ちなみに、報告者の鈴木正博氏は、中妻貝塚の当該土器について、「中妻貝塚の特徴(B2式期の——引用者註)として良い。従って、大森系列(B2式——引用者註)の変容の一例を文様位置及び非磨消手法に求めてよいかと思う⁵⁸⁾」と記しているように、B2式期に於ける地域的な所産と捉えているが、いささかの外れであろう。福田貝塚の土器はB3式に、中妻貝塚の土

器はB3式あるいは曾谷式との比定如何が具体的な課題となると考えている。

千葉県中沢貝塚資料⁵⁹⁾には、ソロバン玉状の器形を有し、口縁部が大きく外反する鉢形土器で注口をもつやや小型の土器がある(図7-5)。磨消縄文部の位置が異なるが、連結部には刺突を伴う一本の縦沈線が加えられている。ソロバン玉状に張り出す体部下半には、やや幅広の帯状の縄文帯をもっている。この土器は体部下半にある帯状の縄文からみて加曾利B3式に比定できるであろう。

中沢貝塚の土器のような磨消弧線文をもつ土器に、埼玉県黒谷田端前遺跡⁶⁰⁾の土器と、千代田遺跡の土器がある(図7-4・11)。前者には弧線文の連結部に縦に2~3本の三角形の刺突列をもち、くびれ部にも刺突列をもつ。後者では連結部に何も加えられていない。この黒谷田端前例は、千葉県祇園原貝塚出土安行1式古段階の角底土器⁶¹⁾のくびれ部以下の文様と共通することから、安行1式の古段階に相当するであろう。千代田例の胴部文様は安行2式の磨消連弧文と呼ぶべきものであろう。頸部文様帯にあるジグザグ状磨消縄文も安行2式の文様と考える。この土器が出土したIV区6号住居址では、現に安行2式の口縁が内湾する平縁深鉢形土器が共伴していると報告されている⁶²⁾。この上向きの半円で構成される連弧文は、中沢・黒谷田端前例のような磨消弧線文の連結部に何も加えられなくなって出現する文様であって、連弧文を構成する一個一個の弧線文が互いに接していないのはそのためである。磨消連弧文の系譜がわかる点で、これらの土器は重要である。

要するに、ソロバン玉状に張り出す体部を有し、磨消弧線文をもつ加曾利B2式の土器は長い変遷過程があることを認識しなければならないであろうし、器形の変化も複雑であることを予想して土器に対処しなければならない。八祖遺跡はこの器形を基本にした各種土器群の様相の一端を垣間見せるB3式中心の遺跡であろう。この遺跡では磨消縄文として三角文や遮光器文様もあり、安行式への移行についてあわせて論じなければならない文様である。同趣の文様は千代田遺跡にも安定的に存在しており、B3~曾谷式に於ける両遺跡の土器の意味はより追求されねばならない。千代田例(図7-11)で考えられるのは、安行式への変遷階梯の中で、当該地域の土器インダストリーに参加し、文様だけでなく文様帯構造にも変化を来たすのであろうと言うことであり、一方、安行式の展開という意味で、他器種に与えた影響も重要である。安行2式の波状口縁深鉢形土器の古い段階(図7-12)から採用されている下向きの半円による磨消連弧文は千代田例の胴部に見られるような磨消連弧文に系統発生的関係を求めるべきと考えている⁶²⁾。

故に、安孫子氏の認識は一般化出来ない。明らかにより追求の手を広げなければならない土器であり、B2式に於ける出現過程は勿論のこと、変容、終末段階に到る全過程(分布域の問題も含めて)の解明が急務であろう⁶³⁾。土器型式研究の上で興味ある対象である。

安孫子氏の所説でもう一つ非常に気になるのは、山内氏がB1式とした土器(図版II-4)をB2式としている点である⁶³⁾。鈴木正博氏も同じ土器に対して新しい扱い方(「加曾利B1-2式」)を提案しているが、両氏とも加曾利B1式期に於ける横帯文以外に並存する主文様について配慮が欠けているのではなからうかと思う。

3. 鈴木正博氏の場合

鈴木正博氏の見解は表1にある如く、山内氏や安孫子氏のように加曾利B1, 加曾利B2, 加曾利B3式という区別ではなく、「加曾利B1」, 「加曾利B1-2」, 加曾利B2, 加曾利B3式である。表からわかるように、山内清男氏のB1式を2分して後半を「1-2式」と命名しているとのことである。『日本先史土器図譜』の土器では図版I, 図版II-1~2が鈴木氏の「B1式」に対応し⁶⁵⁾, 「B1-2式」には図版II-3~4が対応すると主張する⁶⁶⁾。

「B1-2式」提唱のきっかけとなった中妻貝塚の土器については「幅広の口縁部で一旦締まるために内面の稜が目立ち、口縁部は外反する。文様は胴部の脹らみに集中するようになり、次の加曾利B2式へ特徴的に継続するのである⁶⁷⁾」と説明がある(図13参照)。

鈴木氏はこのような土器を「B1-2式」とする理由として、中妻貝塚では「B1-2式」が貝層から出土し、「B1式」が貝層下黒色土層に包含されていること、「B1式」には「大きく五~六段階の変遷を辿っており、そうした変化の大きさと層位を異にする事実は階層性において次元の異なる問題として扱う必要がある」とし、「加曾利B1f式として続けることには意味がない」ことから「B1-2式」が必然的な帰結であると説き、更にa~cに細分している⁶⁸⁾。しかし、いささか片手落ちであろう。何故ならば、B2式の最も古い部分よりもさらに層位的あるいは型式学的に「B1-2式」とする土器が古いことの証明なくては「B1-2式」の下限が定まらないからである。

今少し鈴木氏の主張に耳を傾けると、「B1-2式」の内容として「中妻系列」, 「下総系列」, 「小仙塚系列」, 「大森系列」があるとして複雑な内容に議論が及んでいる⁶⁹⁾。ここで言われる「B1-2式小仙塚系列, 大森系列」とは安孫子昭二氏の編年案でいうB2式(図5-24~26)を指している。鈴木氏の場合、図5-25→同24→同26と考えているが、安孫子氏の案が正しいと思うし、第2節で既に検討したように、安孫子氏の言うB2式をB2式直前の「B1-2式」とするのでは筆者もなおさら賛成しかねると言わざるを得ない。鈴木氏の「B1-2式」とは全く新しい考え方なので、この点に議論を集中してみたい。

先ず以て、中妻貝塚での「加曾利B1式」と「加曾利B1-2式」の層位的出土状態について再検討してみる必要があるだろう。というのも、鈴木正博氏の言う層位的な把握には恣意的な面がある恐れがあるからである。例えば、広畑貝塚にある三つの文化層について、第一文化層, 第二文化層をそれぞれ包含する第三貝層, 第二貝層について、良好な包含状態, 明確な時期差, を報告では指摘しているが⁷⁰⁾, その場合第一文化層全体と第二文化層全体を時期差と見なければならぬであろうが、鈴木氏の考え方によると、「複段連続刻目手法」つまり、二段になる刻文帯を口縁部にもつ土器を第一文化層から除外して、第一文化層から出土した完形品を中心にして「加曾利B3式広畑下層系列」とし、第二, 第三文化層の土器から「曾谷式」, 「安行式」と「複段連続刻目手法」を除いた土器を「加曾利B3式広畑上層系列」とし、「以後加曾利B3式の細分と共に加曾利B3式の

加曾利B式を中心とした編年の大要

(作成：鈴木正博) 03/01/08

日本先史 土器図譜	層位・地点	型式	細別	系列あるいは地方的細別		
				西部関東	東部関東	
∴	∴	∴	∴	∴		
堀之内新形式	(+)	堀之内 2	a, b, c	(*)		
加 曾 利 B 式	古い部分	中妻貝塚下層 (黒色土層)	加曾利 B 1	a, b, c, d(古, 新), e	(*)	
		中妻貝塚上層 (貝層)	加曾利 B1-2	a, b, c	小仙塚 { 1 福田 中妻 { 1 2 僧御堂 2 下総(×) 3 大森 1	
	中位の古さ	遠部包含地	加曾利 B 2	(#)	大森 2 遠部 緩衝(×) (下総・常陸) (×)	
	新しい部分	広畑貝塚	加曾利 B 3	広畑 { 下層 { 古 遠部 { 中 上層 { 新	大森 3 遠部 (#) 広畑 (#)	
曾 谷 式	広畑貝塚 貝の花貝塚5号住	曾 谷	1, 2, 3, 4	高井東 { 1 2 3 4の一部	曾谷 { 1 2 3 4	
	真福寺・曾谷					
安 行 1 式	曾谷貝塚D地点 千代田遺跡	安 行 1	a, b, c	高井東 { 4の一部 5	安行1 { a(曾谷D下層) b(曾谷D上層) c(千代田)	
	岩井貝塚, etc	安行 1 - 2	a, b, c	(*)		
安 行 2 式	中妻貝塚純貝塚	安 行 2	a, b, c, d, e	(*)		

表

1

安定性を示す指標となるであろう」と主張する⁷¹⁾。鈴木氏によれば「複段連続刻目手法」は、「以後の学問の指標として」、「曾谷1式広畑系列」つまり曾谷式の最古の段階にすべきであると言う⁷²⁾。しかし、一方で、「複段連続刻目手法」をもつ大森貝塚例(図1—6)については「曾谷1式広畑系列」とせず、「胴部の文様帯が広畑下層系列(加曾利B3式——引用者註)を決定付けている」という矛盾を犯している⁷³⁾。先にも触れたように、広畑第一文化層に於ける、一段の刻文帯、二段の刻文帯を口縁部にもつ波状口縁深鉢形土器がB3式の当該地方での「指標」たり得ると筆者は考えている。層位的発掘所見が無視されて、鈴木氏独自の型式学的根拠(?)で広畑貝塚出土の土器が配列されているのが垣間見られる気がしてならない。

同様の疑念を払拭すべく、中妻貝塚の層位的所見について検討したい。

中妻貝塚の報告では、調査地点図や調査地点ごとの土層図、それに応じた遺物の記載などがないので、絶望的にならざるを得ないが、土器の層位的出土状況について、鈴木氏によれば報告書の上巻を参照されたいとのこと⁷⁴⁾なので、それに従うことにする。

中妻貝塚文化層(1)によると、第5層黒色土層には「B1式」が主体で、これに前後する破片も僅かながら「混在」するとされている。直上の第4層純貝層からは「B1—2式」が主体でB2式が「混入」していたとある⁷⁵⁾。「混在」なり「混入」と判断する根拠は不明であり、この文化層に対応する土器は全くわからない。この純貝層の文化層としての評価と関係して、出土土器及び「混入」の根拠を明確にすべき責務があった筈であるが、具体的な説明がなく、その労を惜しまれたのは残念である。

別のところで、貝層下黒色土層の「B1式」土器について、出土状態が三種類あることに言及している部分がある。興味ある内容なので少し引用すると、「第3は完形土器の出土である。遺構を伴うことのない完形土器の出土は、貝塚遺跡の場合目立つようである。中妻貝塚では、加曾利B1式と安行3a式に多かった。加曾利B1式には小形ではあるが無傷のまま出土した例もある。この時期(傍点引用者)には地点を変えて純貝層(傍点引用者)があることを考えれば、その純貝層の地点とこの完形土器出土地点とは作業生活に於ける二者(傍点引用者)と把える事が望ましい⁷⁶⁾」とある。文脈から判断するならば、ある貝層下黒色土の地点とある純貝層の地点が「B1式」の時期なのであろう。そうでなければこの文章は意味がない。これは次の説明と対応すると思われる。すなわち、ある地点の貝層最上部に於いて「B1—2式」が出土しているが、その貝層の最下層に於いて「外反する器形の例」が「古い時代の伝統を保っている例と共伴(傍点引用者)しているのがわかる⁷⁷⁾」という部分がそれである。この貝層最下層の后者の土器が鈴木氏の言う「B1式」に相当すると判断出来よう。すると、「外反する器形の例」つまり「B1—2式」との「共伴」の事実があるのはどのように受け取ってみるべきであらうか。

素直に考えるならば、「B1式」の段階から「外反する器形」が伴うということなのではなかろうか。また、「混入」とされたB2式もある種の「B1—2式」と組成をなすかもしれない。

とどのつまり、中妻貝塚での出土土器と層位については、何通りもの解釈が可能なものではなか

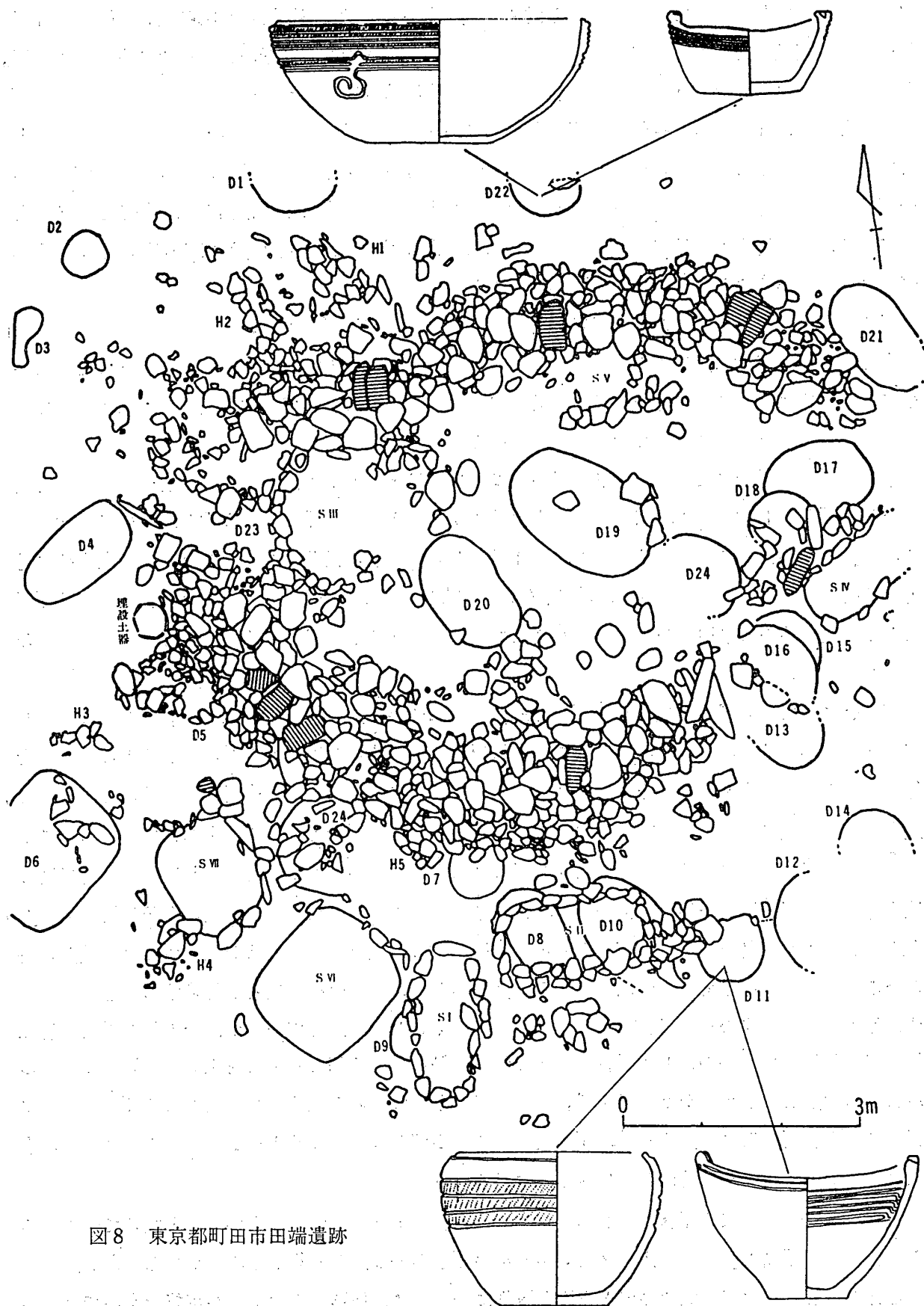


図8 東京都町田市田端遺跡

ろうかと忖度している⁷⁸⁾。

一方、型式学的比較をした場合、「B1式」直後に「B1—2式」が接続するのであろうか。鈴木氏の「加曾利B1式」のa～e細分というのは、例えば『日本先史土器図譜』の土器では「1a式」に図版I—1～2、「1b式」に同3～4、「1c式」は該当例がなく、「1d式」は古と新に分けて、古が図版I—5、新が同6と図版II—1～2、「1e式」には安孫子氏が以前からB1式終末とする土器（図5—9の西ヶ原例）を充当している⁷⁹⁾。図版I—1～2の土器を加曾利B1式の初頭と考えることには賛成だが、どうもこの「B1d、e式」という細分には問題があるのではなかろうか。

鈴木氏の細分の基準をみると、横帯文のみ、それを区切るもの、更に区切り手法の変化、それに単位文自体の相違をも段階差に置き換えているが、氏の言う単位文をもつものでも前段階とされる土器と区切り手法では大差ないのではなかろうか。それらの位置付けには区切り手法の分析から始めるべきと考える。その場合、氏とは異なった細分となろう。また、加曾利B1式の初頭である「1a式」には区切り手法をもたない横帯文をもつ土器すべてを想定しているが⁸⁰⁾、堀之内2式を含んでいるように思われる。それは、図版I—1～2を加曾利B1式の初頭と考えた場合、鈴木氏が「B1a式」としている土器のいくつかは、図版I—1～2とは同時期ではなく、それ以前という意味である。各遺跡内での出土状態を検討していくなら、図I—1～2と他の「B1a式」の中には明確な共伴関係を示さないものがあると思う。筆者は、そのような考古学的文脈から、図版I—1～2の土器をB1式初頭とする意義を見出している。鈴木氏の場合、鈴木保彦氏の加曾利B1式観に引きずられているようである⁸¹⁾。さらに、「土壙」出土資料を集成していくと、横帯文のみの土器と横帯文を区切る例とが共伴していることが多く、かつまた単位文をもつ土器と横帯文のみの土器も一括埋納されている例も少なくない（参考に東京都町田市田端遺跡の例をあげておく。図8参照）。従って、「加曾利B1式」の細分が確定的と言うことは出来ないであろう。さらに、「B1式」や「B1—2式」の中に横帯文や単位文を共通した沈線文で表現している例があるが、それは時期差ではなく平行性の根拠になるのではなかろうか（図13—1～2、図14参照）

以上のように論点を整理して行くと、どうも「B1—2式」を設定し得る客観的根拠というのを見出し難いのである。そうすると、山内清男氏の加曾利B1式の新しい部分を新たに「B1—2式」としたと言うその「B1—2式」とは一体何なのであろうか。筆者の側で解明する責務がある。

はからずも、安孫子昭二氏と同様に、鈴木正博氏に於いても加曾利B1式の捉え方に若干の疑問を抱くのを禁じ得ない。すでに触れたように、B2・B3式についても両氏の型式内容については異論を持つが、B1式の整理を済ませない限り加曾利B式全体に論を巡らすことは出来ないと思うので、彼らの所説に対する疑問を手掛りにしてB1式についてももう少し議論して行く次第である。

4. 問題とすべき土器群とその型式学的分析

イ. 『日本先史土器図譜』と加曾利B1式の範囲

『日本先史土器図譜』の加曾利B1式土器は重要な視点を提供してくれるようである。

図9-3は福田貝塚出土のB1式として提示された鉢形土器の横帯文の展開拓図である。例えば図9-1の大森貝塚の鉢形土器とは、横帯文間に単位文をもつことでは共通するが、横帯文の文様の各所を見ていくとその違いの多いのに気がつく。その違いは横帯文を区切っている手法に見い出せる。大森貝塚例では、横帯文を区切る沈線というのは一つ一つの細帯の一ヶ所に一つずつあって、下に行くにつれて左にずれているが、このような手法は汎関東的に存在し一つの段階を形成している。福田貝塚例には、そのような整然とした横帯文の区切り方ではなくなっているのが拓図から判断できるであろう。口縁部の突起直下のところでは一つの横帯文内の細帯を区切るのに鉤状の沈線を三つ組み合わせていて、さらに同帯の右側では一つの細帯を二つの点列に近い沈線で区切っているのが見える。両方の区切り方も、上から下へ行くにつれて左へずれていく点で共通している。このクセは大森貝塚例などに見られる区切り手法からの系統的变化、発生関係を如実に示していると判断できる。両者を同一段階とするべきとの見解もあるが⁸²⁾、筆者は時期差と捉えるべきだと考える。というのも、福田貝塚例の拓図をより詳細に観察するならば、下段の横帯文中の細帯の一部が狭長な長円形の文様を呈しているのを見い出す。これは全く新しい文様であって、この土器が大森貝塚例に見られるような区切り手法をもつ土器よりも時期的に新しいことをもう一方から証明していると言えるであろうと考えているからである。

今、ここで、この狭長な長円形文に注目すると、この長円形文をより発達させる土器として千葉県余山貝塚の鉢形土器⁸¹⁾(図9-4)があげられるであろう。この土器では縄文地文上に長円形文を加えていて、磨消手法は用いられていない。ところで、この土器には五ヶ所長円形文上に重ねるように奔放な曲線文による単位文が加えられている。恐らくこれは福田貝塚例(図9-3)に見られるような単位文からの変形であろう。千葉県千代田遺跡の鉢形土器(図9-5)は同趣の土器としてあげられるであろう。ただしこの場合、長円形文の間に、奔放な曲線による単位文を配している。

余山貝塚例のように長円形文を展開する土器が出現する前段階的状况を型式学的に推測した場合、中妻貝塚の鉢形土器(図9-2)にみられる横帯文の構成の仕方、鈴木正博氏によって「交互弧線文」と呼ばれている手法⁸⁴⁾に注目すべきであろう。推察するに、この手法とより細帯化する横帯文とが組み合って、長円形文へと受けつがれていく文様系列を発生させるのであろう。その意味で、中妻貝塚例は福田貝塚例よりも古いと考えている。

千葉県中野僧御堂⁸⁵⁾の鉢形土器(図9-10)は単位文をもたない長円形文だけの土器であるが、余山貝塚の土器と同様に縄文地文上に長円形文を描き磨消手法は採用されていない。単位文がないのは、祖形となる土器に於いて単位文を有していないことに帰因するのであろう。神奈川県西富貝

縄文時代後期加曾利B式土器の研究 (I)

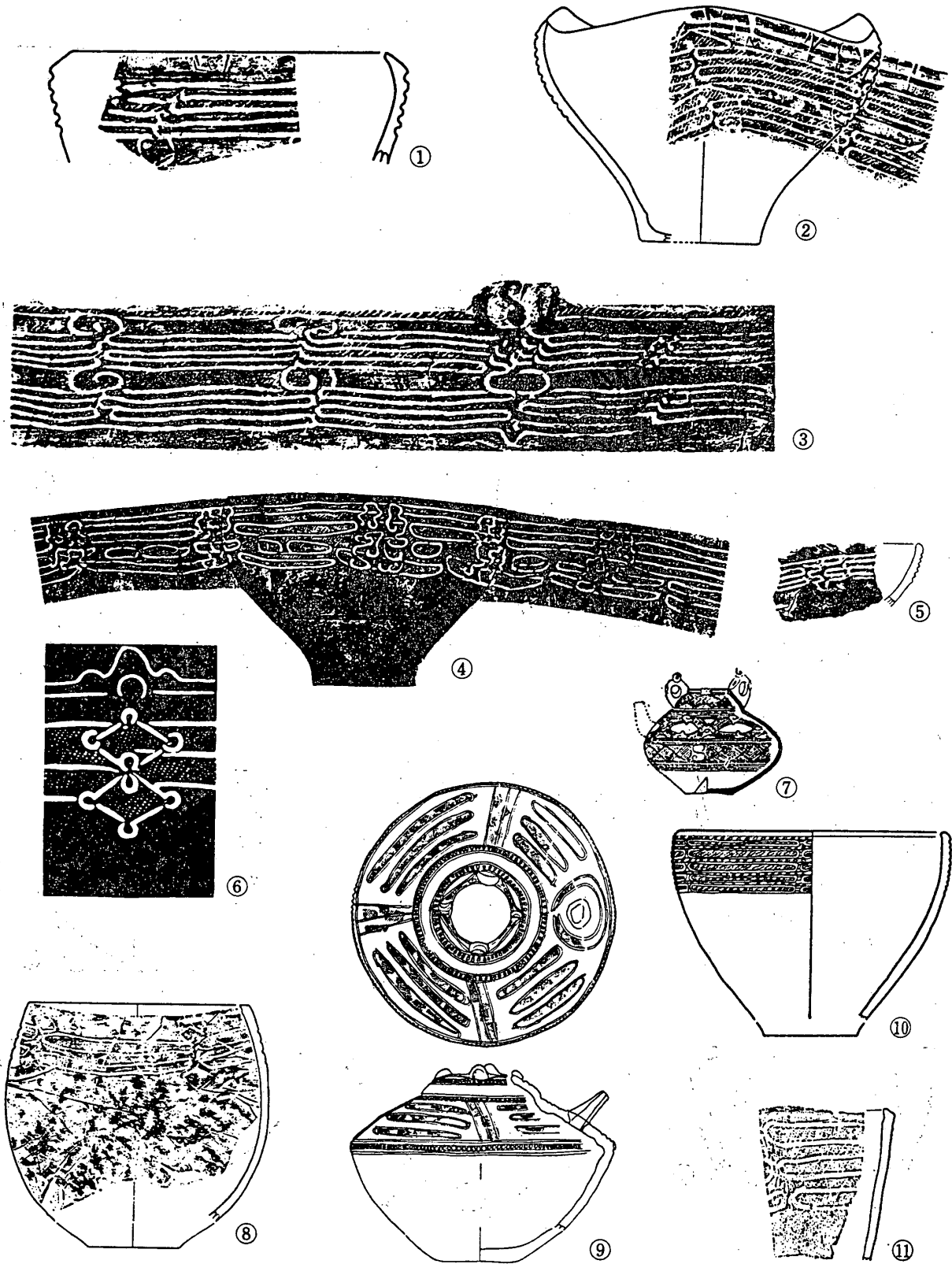


図9 1: 大森貝塚, 2-8: 中妻貝塚, 3: 福田貝塚, 4: 余山貝塚, 5: 千代田, 6: 西ヶ原貝塚, 7: 堤, 9: 高井東, 10: 中野僧御堂, 11: 神野向 (縮尺不同)

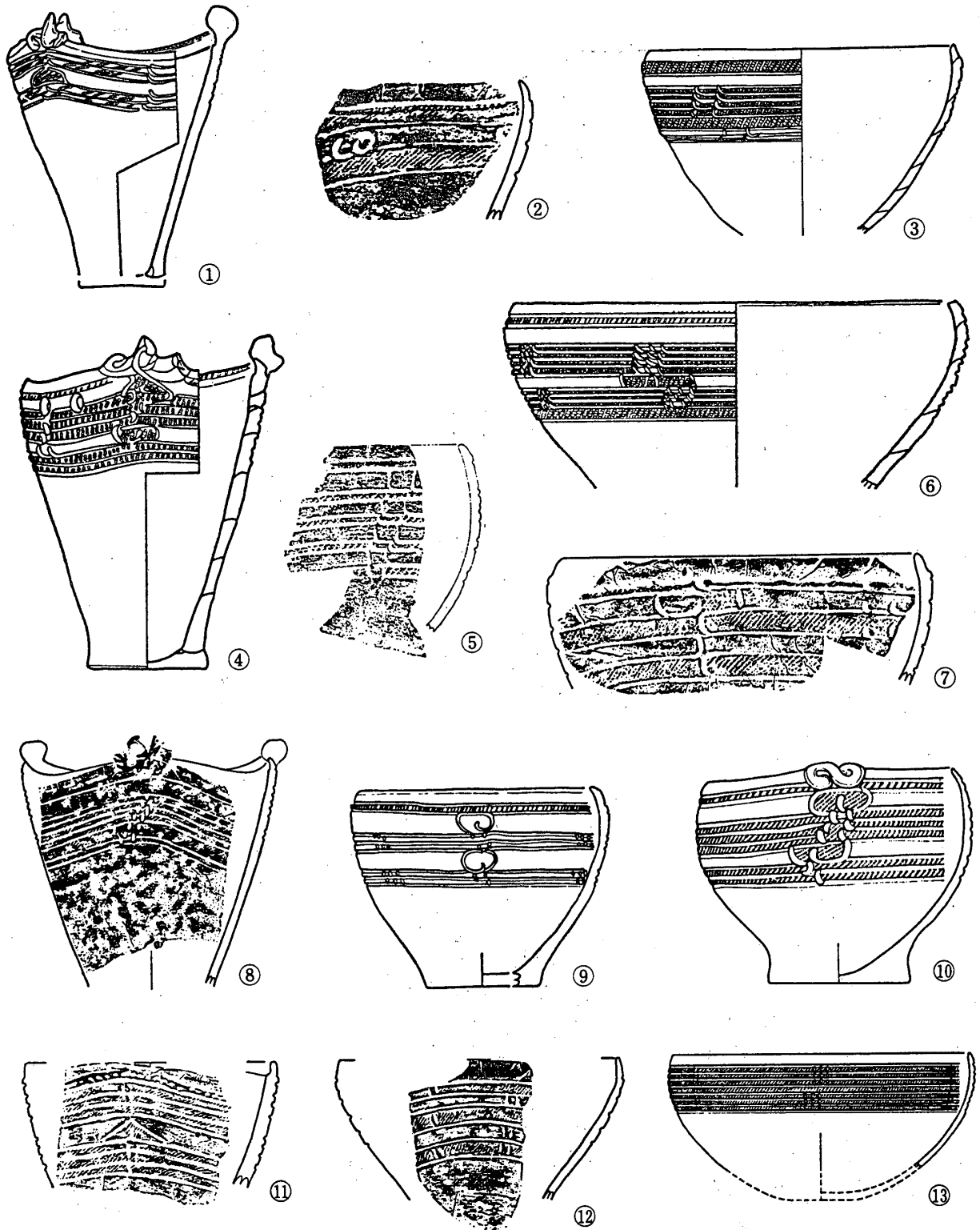


图10 1-4-6: 中野僧御堂, 2: 大森貝塚, 3: 築地台貝塚, 5: 大貫落神貝塚,
7-8-11-12: 中妻貝塚, 9: 足利, 10: 金土貝塚, 13: 神明貝塚 (縮尺不同)

塚⁸⁶⁾第1号住居址覆土出土の土器(図12-4)は磨消手法の長円形文をもち、中野僧御堂例よりも後出的であると思われる。

埼玉県高井東遺跡⁸⁷⁾出土の注口付土器(図9-9)の体部に見られるのは、三段重ねた磨消長円形文である。この土器の器形は神奈川県堤遺跡例(図9-7)に見られるようなB1式⁸⁸⁾から由来するが磨消弧線文から見てB2式を遡るものではない。長円形文がB2式へ連なるのを示す例である。茨城県神野向例⁸⁹⁾(図9-11)も高井東例と同趣の三段の長円形文を重ねているB2式段階の土器と考えている。鈴木正博氏によって「加曾利B1-2式下総系列第1類f種土器」と呼ばれる中妻貝塚出土土器(図9-8)も、横帯文から長円形文を生成する流れの中で理解すべき土器である。この土器には二段の長円形文の間に上下二つのひし形文を配している。ひし形文自体は、後田貝塚遺跡のB2式(図2-5)と同じであり、時期を考える上でこのひし形文は重要であろう。やはりB2式であろう。しかしながら、中妻貝塚例のような、長円形文を2段配する間に上下二対のひし形文を配する構成は、東京都西ヶ原例⁹⁰⁾(図9-6)の突起を有する深鉢形土器の胴部文様、つまり二段の横帯文中に上下二対のひし形文を配置する文様構成が直接の祖形ではないかと思っ

ている。後田貝塚例とは文様構成で祖形となるものが違うであろう。いずれにせよ、以上はB1式に始まりB2式へ連なる横帯文の一つの変化系列として重要であろう。B2式では色々な器種に採用されているようである。

ここで、福田貝塚の土器(図9-3)で触れた区切り手法の変化についてももう少し探ってみよう。

中野僧御堂遺跡出土の図10-1の土器は、大森貝塚例(図9-1)と同じ手法で横帯文を区切っていく、三単位の突起を有する深鉢形土器である。同じ遺跡出土の同形式の深鉢形土器(図10-4)を見ると、区切り手法の変化がわかる。下段の横帯文を見ると左よりのところには、区切りのための鉤状沈線が二つ一ヶ所に集まり、かつ、横帯文ではなく無文部を区切っているのがわかる。その直上には上段の横帯文を区切る鉤状あるいは直線的な短沈線がある。中央部に目を移すと、「区切り弧線文」となる手法がバラツキ始めて弧状の短沈線がうまく細帯を区切らなくなっている。

中妻貝塚の鉢形土器(図10-7)では「区切り弧線文」はしっかりしているが、各横帯文を構成する横走沈線上に小さな鉤状の沈線がやはり二つづつ加えられている。この場合、それらは文様帯、無文帯を区切らなくなっている。茨城県大貫落神貝塚⁹¹⁾出土の鉢形土器(図10-5)は、細い横帯文と無文帯を交互に何段もくり返しているが、それぞれ二つよせた小さな鉤状沈線と大きな鉤状沈線とが下に行くにつれて左の方へずれながら区切っている。大森貝塚の鉢形土器(図10-2)は横帯文の上端に沿って二つだいたい変形した鉤状の短沈線を加えている。その付加する位置は中妻貝塚例(図10-7)と似ているし、無文帯を区切っていないことも共通する。

図10-3の千葉県築地台貝塚⁹²⁾の鉢形土器は、上下二段(下段には縄文はない)の横帯文中の細帯を区切るのに、やはり二つよせた鉤状の沈線を用いている。上下の横帯文間にはやや幅広の縄文帯をもっている。本来は、例えば中野僧御堂例(図10-6)のように単位文をもつ部位であろう。また、中野僧御堂例では、区切り沈線が一つの細帯に対して三つ用いられているのが特徴である。

以上の深鉢形、鉢形土器が示す横帯文中の区切り手法上の特徴は、福田貝塚の鉢形土器について分析したのと同質のものであり、これらを合わせて一つの段階を形成するものと考えている。前段階には図9—1・図10—1のような整然とした斉一的な区切り手法をもつもの、横帯文のみのもの（図8 D11ピット出土左の土器）、横帯文を「交互弧線文」で構成する土器などが存在し、それからの変化がかなりの多様性を有してくるのが看取されるのではないかと思う。

茨城県金土貝塚⁹³⁾の鉢形土器（図10—10）は今分析した土器群（図9—3；図10—2～7）と同期として考えるべきであろうが、上段の横帯文の区切り手法を見ると、鉤状である筈の区切り沈線がより短沈線化し、下帯の区切り弧線文となるべき沈線は弧線的でなくなって、例えば図10—4に比して区切り沈線がより退化的な傾向を示していると考えられよう。

埼玉県足利遺跡⁹⁴⁾の鉢形土器（図10—9）は横帯文中に、二個一対、三個一対の点列に近い区切り短沈線がある。図10—4、10、9と見てくるならば、鉤状部分が単なる点列風なものにすべて変わって行ったのがわかるだろう。ただし、付加される区切りとしての短沈線の位置が上から下へ行くにつれ、ずれて行くのは以前からの傾向を残していると言えよう。中妻貝塚の三単位の突起を有する深鉢形土器（図10—8）は、例えば築地台貝塚の土器（図10—3）に見られる二段の横帯文と区切り手法からの変化である横帯文と区切り手法をもっている。この場合も、二個一対の区切り短沈線が上から下へ行くにつれて左へずれるようにして施文されている。従って、8や9の土器は更に新しい段階であると考えている。

さて、中妻貝塚出土の深鉢形土器（図10—11）は二段の横帯文中に単位文をもち、同貝塚の鉢形土器（図10—12）は横帯文と無文帯を交互に配する土器で、埼玉県神明貝塚⁹⁵⁾の浅鉢形土器（図10—13）は二段の横帯文をもっていて、それぞれ横帯文の構成を異にしているが、横帯文中に二個一対あるいは三個一対の区切り短沈線が上下に連なり、左右にほとんどずれていない点で共通する。

この共通性は、図10—8、9に至る区切り手法の変化の過程には見い出せず、8、9よりも型式学的に新しいと考えざるを得ない。

ここで、今までに取り上げてきたB1式の区切り手法の変化系列について、編年的な整理をしておく

図9—1，図10—1 → 図9—3，図10—2～7 / 図10—10 → 図10—8～9 → 図10—11～13

と整理できよう。そのような区切り手法の連続的な変化から見て、二本一対の短縦沈線文に代って、二個一対になる真正の弧線文が横帯文中を縦に区切るように連なる「縦連対弧文」手法をもつ土器は、図10—11～13に代表される段階よりも後に置いて考えなければならないであろう。

結論的なことを先に言うならば、図10—11～13の段階を筆者は一応加曾利B1式の終末と考えている。というのも、この段階以後の土器として、横帯文中に「縦連対弧文」を有する福田貝塚出土の鉢形土器⁹⁶⁾（図11—5）を置いて考えているのだが、この土器を加曾利B2式初頭と考えているからである。鈴木正博氏は図10—11～12を氏の「B1式」の終末としている。

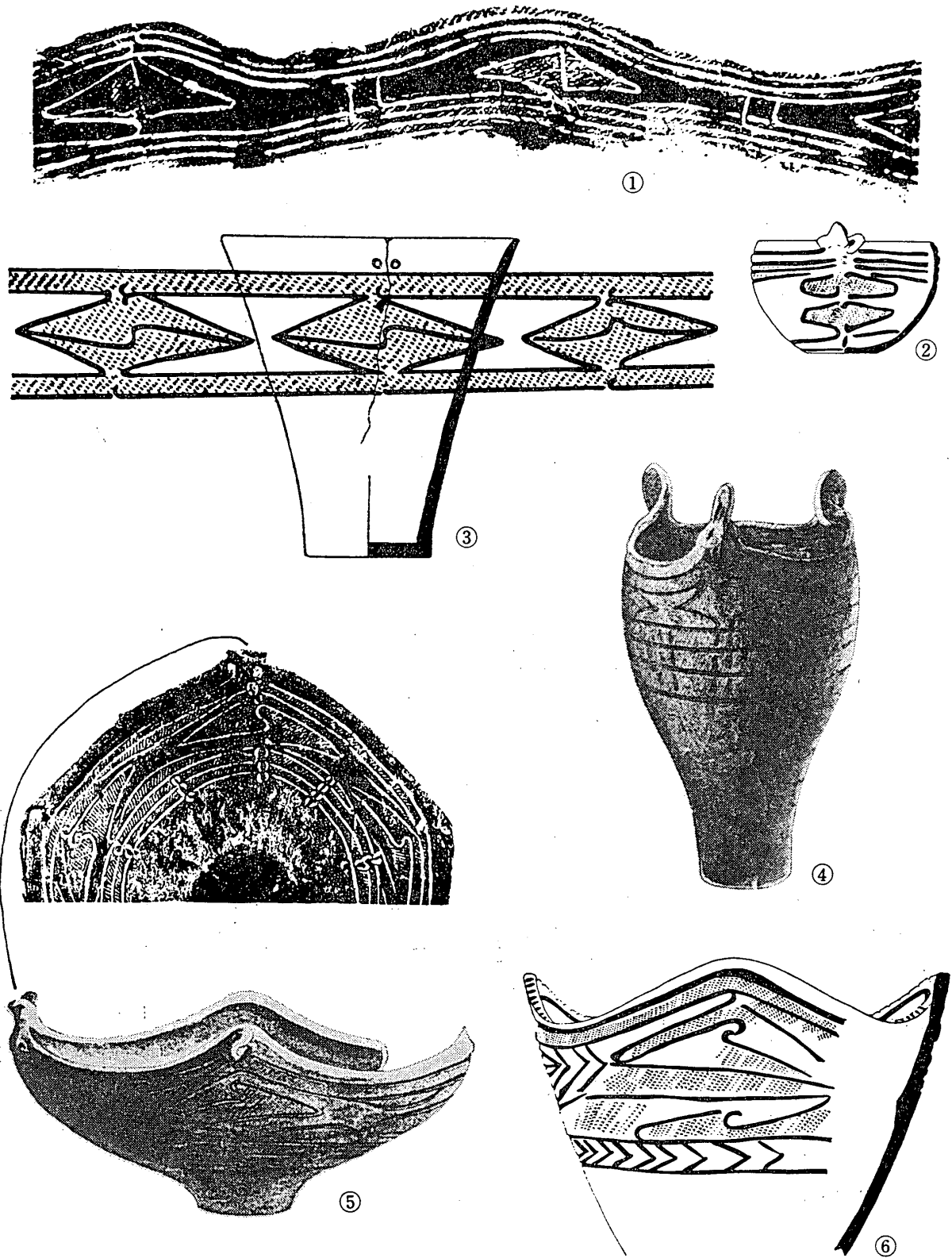


図11 1-5：福田貝塚，2：西富貝塚1号住居址覆土，3：余山貝塚，4：立木貝塚，
6：中沢貝塚（縮尺不同）

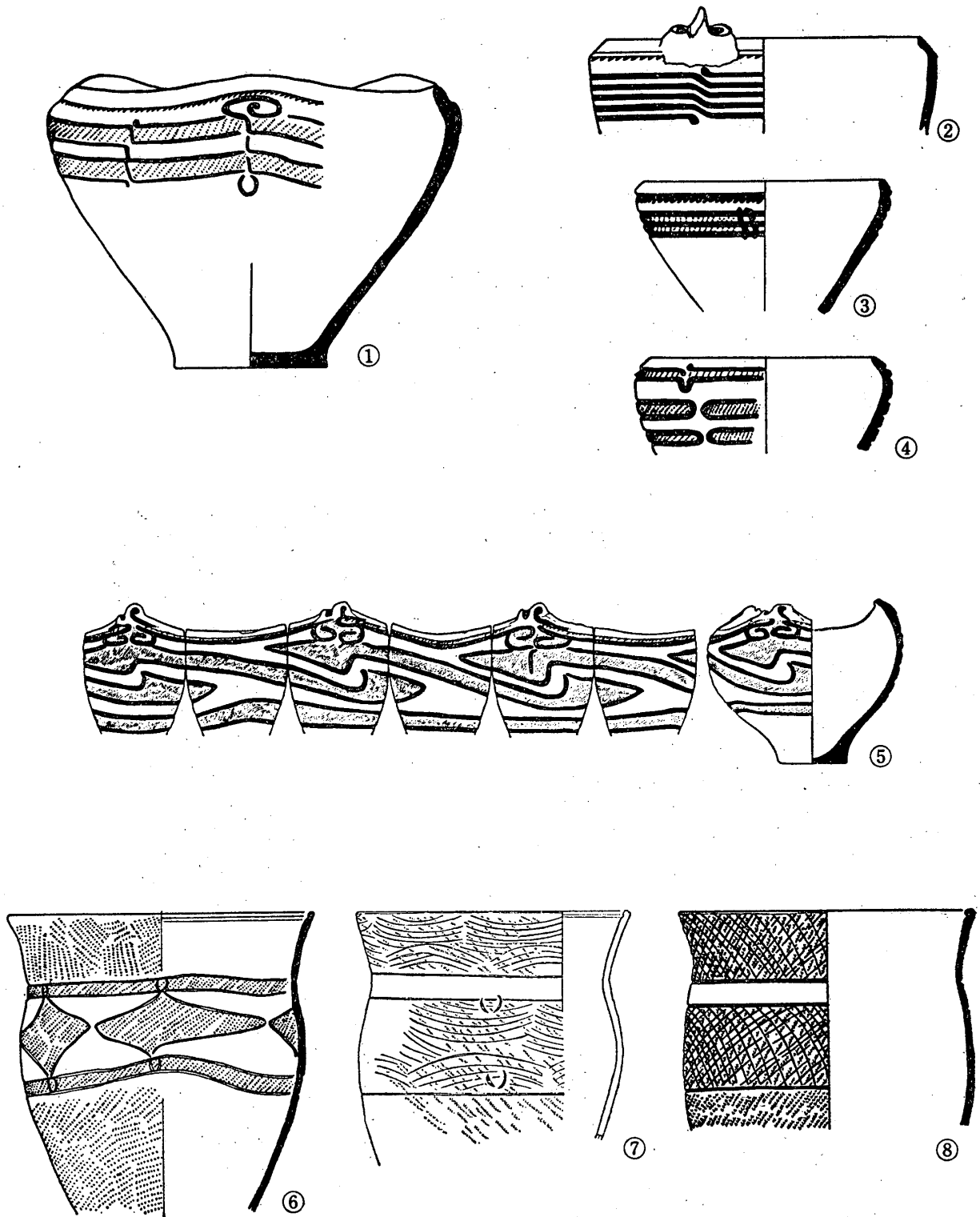


図12 1~2: 西富貝塚1号住居址床面, 3~4: 西富貝塚1号住居址覆土, 5: 廻戸貝塚, 6: 石道谷津, 7: 貝の花貝塚, 8: 加曾利南貝塚 (縮尺不同)

長円形文の変化系列については福田貝塚例（図9—3）の段階がほぼ起源の段階であろう。区切り手法の変化系列とのより細かな対比は型式学的操作のみならず、今後一括資料などで組み立てて行くべきと思うが、現状でも参考となる資料はある。

神奈川県西富貝塚第1号住居址の床面土器群と覆土中の土器群を今整理した横帯文の区切り手法の変遷で比較した場合、床面出土の土器（図12—1、2がその一部）がほぼ図10—1に代表される段階に平行かむしろそれよりも古く考えられる一方、覆土中の土器は床面出土の土器よりは新しい様相の土器が多く、その中に長円形文をもつ土器（図12—4）と区切り手法が縦の短沈線に変わっている土器（図12—3）があり、その他にも横帯文の変化を示す土器（図11—2）があり、その在り方は注目すべきであろう。出土土器中には加曽利B2式土器がないのも時期を考える上で意味のあることであろう。

ここで、B2式初頭と考える福田貝塚出土の鉢形土器（図11—5）について、そのように考える旨を述べておく必要がある。この福田貝塚出土のB2式初頭と考える鉢形土器も、B1式の横帯文をめぐる別の変化を受けついでいるようである。

図11—1は『日本先史土器図譜』に提示されている福田貝塚出土の鉢形土器——鈴木正博氏によれば「B1—2式」と呼ばれる——の展開拓図である⁹⁷⁾。図譜で見えているひし形類似の文様をもつ波頂部のところは、この拓図では右端になっている。この土器の横帯文中には一部区切り弧線文があるが、他に二つの大きな鉤状の区切り沈線文が波底部付近の横帯文間の無文部を区切っている。鉤状の区切り沈線文の一つは下の横帯文中の上段の細帯も区切っている。この土器の場合、図10—5の土器と細部ではやや異なるが、同じように大きな鉤状の区切り沈線文が二つ合わさって無文部を区切っていることは共通している。両者を同一段階と考える根拠となるであろう。従って、筆者は、鈴木氏のいう「B1—2式」ではなく、この土器もB1式と考えている。

ところで、この福田貝塚出土の鉢形土器（図11—5）には他にも注目すべき変化がある。拓図をみると、下の横帯文の左端と、右側の波底部にあたるやはり下の横帯のところ、ちょうどひし形類似の単位文との間になるところにはわずかにだが横帯文の最上部の細帯が円弧状に盛り上がるかのような磨消縄文帯になっている。西富貝塚第1号住居址覆土出土の鉢形土器（図11—2）は、二段に重なるひし形類似の単位文をもつが、その口縁部下の横帯文も下部がやはり弧状にふくらんでいる。福田貝塚の鉢形土器の横帯文中に見られるのと同趣の変化であろう。両者同一段階と考える。それらから、単位文を間に挟む横帯文の一つが円弧状に変化する流れがあると型式学的な推測を立てるならば、福田貝塚出土の二単位の突起の付く鉢形土器（図11—5）の文様の在り方が説明できるであろう。この土器の場合、口縁部の一段の横帯文と、体部の二段の横帯文のそれぞれ下端、上端に、ちょうど単位文を間に挟むように、下向きと上向きの磨消円弧文をもっている。この磨消円弧文の起源・系統は、福田貝塚や西富貝塚の土器（図11—1～2）の横帯文中に見られる変化に求められるであろう。

福田貝塚出土の二つの鉢形土器の横帯文に系統的関係があると考えべき点で、もう一つ参考と

なるのは、両者に於いて採用される単位文としてのひし形類似の文様が文様の類似だけでなく一筆書き的手法で両者が共通している点である。両者とも波頂部の直下にひし形類似文を配するのであって、横帯文及びひし形類似文をあわせた文様構成に於いて、両者は一つの系列の中の前後関係に置き換えられるのである。もっとも、福田貝塚例(図11—5)のひし形類似文の中央部の沈線文がS字状に入り組んでいるのは、千葉県余山貝塚の深鉢形土器⁹⁹⁾(図11—3)に見られるようなひし形類似文の中央部にS字状の入り組み沈線が加えられているのと無関係ではないと考えている。しかし、余山例がもつひし形類似文は一筆書き風ではなく、福田貝塚の土器の場合(図11—1・5)とは描き方がちがう。余山貝塚例のひし形類似文は、三角形の沈線を2つ組み合わせて作られていて、ひし形を構成する右側の沈線文の先端が鉤状になっているのが特徴である。この描き方は、恐らく西富貝塚例(図11—2)のひし形類似文に由来する系統ではなかろうかと思う。

余山貝塚例と同じひし形類似文をもつのが立木貝塚の土器⁹⁹⁾(図11—4)である。この土器は三単位の突起をもつ深鉢形土器で、この単位文の下に横帯文を有している。この横帯文中には、突起の下や波底部に対応するところに区切りのための二個一対の短沈線が上下一つに連なるように加えられているところから判断して、先に触れた図10—11に代表される段階に対比できると考えている。余山貝塚の深鉢形土器は、ひし形類似文の特徴から見て、立木貝塚の深鉢形土器と平行すると考えているので、先の考察から、福田貝塚の鉢形土器(図11—5)よりは古く位置づけられる。

この福田貝塚出土の鉢形土器は4単位の波状口縁をもつ鉢形で、隣り合わない波頂部に左右対称な突起をつけている。後田貝塚のB2式に伴う、やはり左右対称な突起をもつ鉢形土器(図2—12)が器形、形態的に近似していると考えられる。しかし、突起自体の形態は福田貝塚の土器の方が古く、体部羽状沈線文をもつ権現台の土器(図6—1)がもつ突起の形状が一番近いのではないかと思う。さらに、福田貝塚の鉢形土器の時期的な問題を論ずる場合、四単位の波状口縁深鉢で胴部の文様帯や波底部下にB2式の羽状沈線文をもつ中沢貝塚¹⁰⁰⁾の土器(図11—6)が参考となろう。中沢貝塚の深鉢形土器の波頂部下に一筆書き風の入組み状の沈線文があり、福田貝塚の鉢形土器の波頂部下にある一筆書き風のひし形類似及び入組状沈線文と近い関係にあると思われる。つまり、体部あるいは胴部文様として、羽状沈線文と縦に連なる対弧文で区切られる横帯文の平行関係がわかるであろう。

公津原 Loc. 39 で問題にしたB2式に於ける上下に向いあう磨消円弧文(図3—5)は、福田貝塚の土器に見られるような上下に向いあう磨消円弧文と同趣の文様であろう。後田貝塚のB2式土器の場合(図2—5)のような磨消縄文の位置は異なるが上下に向い合う円弧文とその間に配されるひし形文という全体的な構成は、やはり福田貝塚の鉢形土器のそれに共通するところがあると考えべきであろう。福田貝塚の土器がB2式という概念・型式内容から見て、時期的に微妙な位置にあることがわかる。その点をさらに補足するならば、関連資料として大森貝塚の深鉢形土器の文様構成(図1—3)があげられるであろう。この土器はB2式に通有な大形の波状口縁をもち、口唇部は外面、内面に突出しそこに刻文帯をもち、頸部で一度縮約し、内面には稜が作出され、胴部

が張り出す形になっている。文様帯はくびれ部直上にあり、その点で波状、平縁の違いはあるが、後田貝塚の土器（図2—10）と同じである。文様は横帯文（最下段のみが磨消縄文）とその上に磨消円弧文をのせていて、円弧文を含め横帯中には縦に連なる対弧文が配されているのである。円弧文からその下の横帯文中に縦に連なる対弧文が配されるその在り方は、同様のものが福田貝塚の鉢形土器の磨消円弧文と横帯文が重なっているところに見い出せるのであり、両者には同じ由来をもつ文様が配されているのである。

要するに、今まで分析してきたように、加曾利B1式のより新しい段階と型式連鎖を求めていく上で、福田貝塚の突起をもつ鉢形土器は、器形、文様等の内容上、B2式的であると言わざるを得ないのである。そのような意味で、福田貝塚の鉢形土器をB2式の初頭と考えているのである。図10—11～13、図11—3～4のような土器は、従って、B1式の終末と考える訳である。

今問題にした余山貝塚出土の深鉢形土器（図11—3）については、もう少しその意義を分析する必要があるようである。

余山貝塚出土の深鉢形土器は、底部からほぼ直線的に外反し、口縁部に最大径をもつ器形をしていて、胴部やや上半に文様帯を有している点に特徴があると言える。その場合すぐに想像されるのが後田貝塚のB2式土器（図2—8）である。この土器も底部からほぼ直線的に外反し、口縁部に最大径をもつ器形を呈し、胴部文様帯の位置は正に余山貝塚の深鉢形土器に共通するのである。後田貝塚例はその文様帯に斜沈線文を配しているのもであって、これは時期的違いの所産である。余山貝塚例の如きB1式がどの程度の安定した存在であったのか追求しなければならないであろう。

余山貝塚の深鉢形土器でもう一つ触れておかなければならないのは、その文様構成であろう。この文様構成の変化から登場するのが、鈴木正博氏によって「B1—2式中妻系列下総類型石道谷津形式」と呼ばれた、千葉県石道谷津遺跡の深鉢形土器（図12—6）であろう。ひし形類似文からひし形文に変化し、横帯文中ひし形類似文と接する部分にある鈎状の部分に対弧文に変わったものと理解できよう。しかし、器形は系譜を異にするようである。器形はB2式の粗製土器と同じである。例えば加曾利南貝塚¹⁰¹⁾の粗製土器（図12—8）と比較するならば、器形及び口唇部内面に横走する一条の沈線などがよく似ている。千葉県貝の花貝塚の土器¹⁰²⁾（図12—7）を介在させればその関係は明白であろう。石道谷津例と貝の花貝塚例とは器形で共通する一方、貝の花貝塚例の胴部にある対弧文は石道谷津例の対弧文に対応するであろうし、貝の花貝塚例と加曾利南貝塚例とは器形及び沈線区画の位置で共通している。配される基本的な文様に於いて差異を見せているだけで、これは同一時期に於けるそれぞれの土器が由来する背景の問題であろう。「中妻系列」の性格を考える上で重要である。そのような理由から、筆者は石道谷津例をB2式と考える。

鈴木正博氏によって「B1—2式」とされる茨城県廻戸貝塚の鉢形土器は、太い沈線文によっていささか特異な文様構成を示している。図12—5はその展開図である。図を観察すると、S字状の横位の突起間は刻文帯が配され、突起直下にある単位文に結び付くかのように特異な形状の磨消縄文が発達しているのがわかる。この特異な形状の磨消縄文が上の単位文と付くあたりは、ひし形類

似文の一部に極似するのではなからうか。例として必ずしも相応しいとは言えないが、図11—2のような二段重ねのひし形類似文からの変形、発達を示すのではなからうか。恐らくその間には、長円形文を発達させるのと同様のファクターが関係し、一方、下段の磨消縄文のモチーフからは東北の様相を見いだせる。廻戸貝塚例は西富貝塚例(図12—4)に平行すると考えている。この土器もB1式の範疇を逸脱しないことは間違いない。

同様に、安孫子昭二氏によってB2式とされる神明貝塚の鉢形土器(図10—13)は既に分析したようにB1式の終末と筆者は考えているのである。

要するに、加曾利B1式のある段階——『日本先史土器図譜』の土器に代表させるなら、福田貝塚の鉢形土器二例(図版Ⅱ—2~3)——からはB1式の基本である横帯とそれにかかわる単位文、区切り手法等々がそれぞれあるいは組み合って様々の変容を遂げていくのであって、『日本先史土器図譜』の他の土器(図版Ⅰ—1~6, 図版Ⅱ—1)はそれ以前の土器である。そのような土器と本節で分析した加曾利B1式をあわせたものがB1式の範囲と考えている。西富貝塚1号住居址覆土中にそれぞれ系列を異にする文様をもつ土器(図11—2, 図12—3~4)や他にも変異体の土器があるのは単なる偶然ではないであろう。この住居址覆土出土の土器は、加曾利B1式の変容様式を示すものとして重要である。結局、B1式の単位文と横帯文の様々な変化はB2式へ受けつがれらると見なすべきなのであろう。

そう考えてくると、安孫子氏や鈴木氏がB1式の終末としている西ヶ原の土器(図5参照)は終末と位置づけるのは疑わしいであろう。両者がこの土器をB1式の終末と考えるのは、突起下に対応する横帯文中にある「(|)」状の沈線文に、それぞれ別の視点からではあるが、注目してのことである。しかし、波底部に対応するところの横帯文の区切り手法に着目するならば、図10—1の段階に対比すべき手法で、その段階より新しく考えることは難しいであろう。ちなみに、西ヶ原例の横帯文中に施文される「(|)」状沈線文は、加曾利B1式の初頭である豊沢貝塚例¹⁰³⁾・中妻貝塚例¹⁰⁴⁾に見られる、横帯文を構成する平行沈線文と渦状あるいは弧状沈線とで構成する文様に由来し、長く用いられると考えている。西ヶ原例をB1式の終末と考えてしまったことによって、両氏のB1式の内容がせまいものになってしまったのではなからうかと危惧する次第である。安孫子氏はB1式をせまく考えてしまったことから、B1式にすべき土器をB2式にしてしまったのではなからうか。一方、鈴木氏の場合も、「B1—2式」を提唱してしまったことはB1式をせまく考えたことが原因となっているのであろう。氏の「B1—2式」は多くがB1式に含まれるべきものと思うが、現に今まで再検討した土器はB1式とすべきものが多く、残りはB2式であった。そうすると、「B1—2式」設定に最も係りある「中妻系列」は当然再編成して考えなければならなくなる。

ロ. 「加曾利B1—2式中妻系列」の再編成

「中妻系列」の土器はその特徴を再確認しておくならば「体部上半で縮約し、緩やかに脹らむ胴部を呈する平縁深鉢形が特徴であり、内文は殆んど存在しない。口縁部を縄紋帯とする限定性がある

縄文時代後期加曾利B式土器の研究 (I)

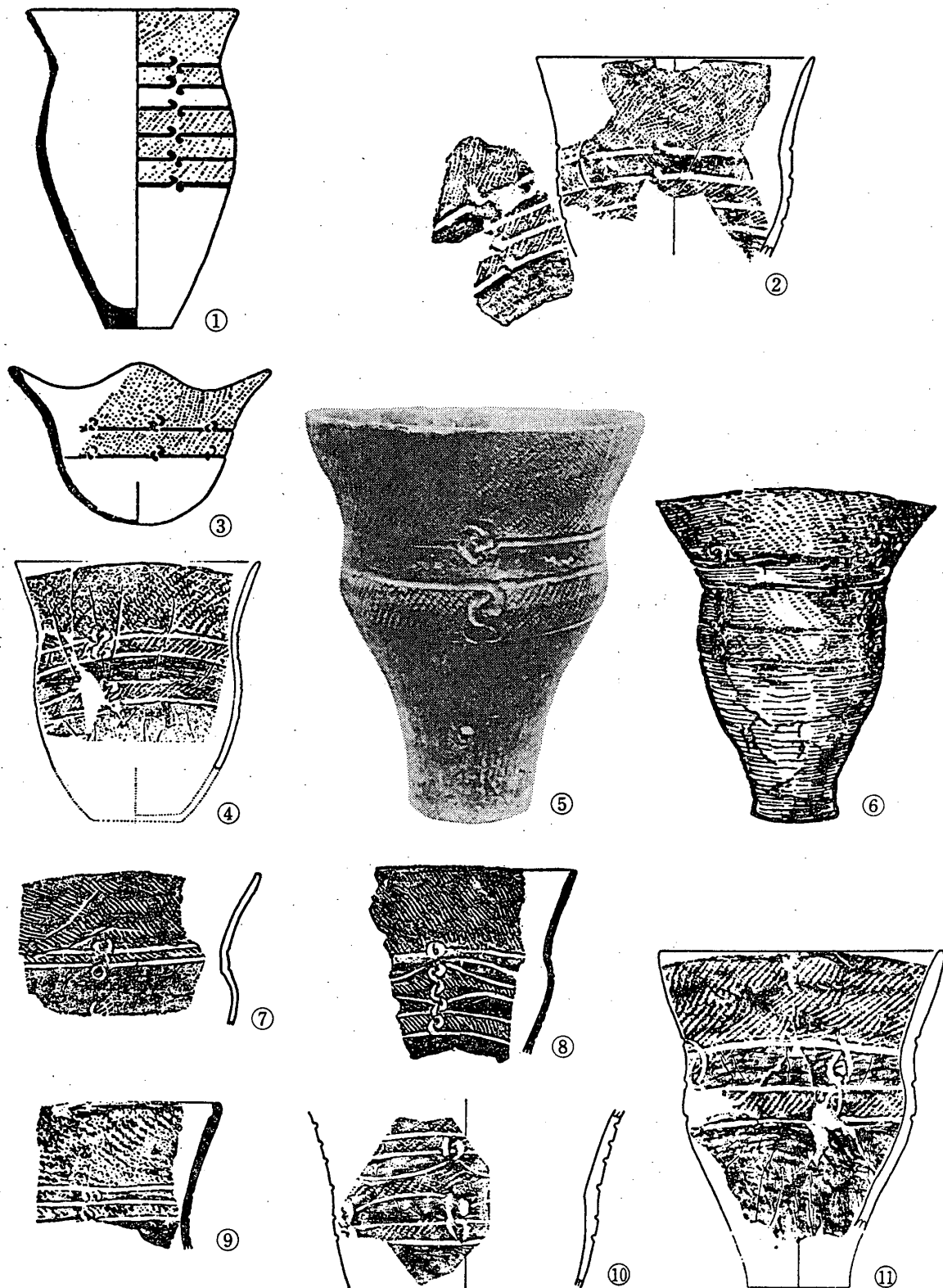


図13 1-3: 鬼越貝塚, 2-10~11: 中妻貝塚, 4: 大貫落神貝塚, 5: 椎塚貝塚,
6: 立木貝塚(?), 7: 深見新田, 8: 加曾利南貝塚, 9: 立木貝塚(縮尺不同)

る¹⁰⁵⁾」とのことであり、主文様については「Ⅱ文様帯は胴部の脹らみに集約されるが、磨消横帯文あるいは磨消横連対弧文が類型化される¹⁰⁶⁾」と説明される土器群である。

鈴木正博氏はこれらの土器について胴部文様帯の文様に着目して、系統的及び時期的な細分に取り組んだのであるが、スムーズな変遷を迎えていないようである。筆者は、むしろ口縁部縄文帯にある文様帯と文様について、系統的・時期的分類を試みようと思う。口縁部縄文帯には文様帯をもつ場合とそうではない場合があるが、これは時期差ではなく系統差と考えてみたい。そして、その上で、口縁部縄文帯中の文様の変化を追うことで時期的細分は遂行できると思うのである。

筆者は「中妻系列」の土器を分析する上で、現在の資料的制約の中では、基本とすべき資料として嘗て報告された茨城県鬼越貝塚¹⁰⁷⁾出土の土器(図13—1)があげられると考えている。胴部には先端が鉤状になる沈線によって三段の横帯文が形成され、無文部をはさんでその上のくびれ部付近に、先端鉤状になる沈線によって横帯文が形成されている。鬼越貝塚の他器種を見ても先端が鉤状になる沈線で文様が描出されている土器があり(図14—1～2)、この貝塚の土器に於ける一つの特色と言つてよいであろう。やはり鬼越貝塚出土である波状口縁をもつ鉢形土器(図12—3)は、口縁部縄文帯の下半に二本沈線があり、それを区切るかのように入組みとなる対弧文が施文されている。この文様帯は、鬼越貝塚例(図13—1)の口縁部縄文帯の下端にある文様帯に対応するのであろう。しかし、鬼越貝塚では先端鉤状沈線で文様が区画されるものが各器種にわたり安定して存在していることからみて、この鉢形土器のように入組対弧文をもつ土器は時期的に後出と見なければならぬであろう。その場合、入組対弧文は鉤状の部分が変化したものと考えてのことである。

遺跡は異なるが、大貫落神貝塚出土の深鉢形土器(図13—4)が文様上鬼越貝塚の鉢形土器に対応する深鉢形土器であろう。つまり、口縁部縄文帯の下端付近に文様帯をもつ土器で、ここに鬼越貝塚の鉢形土器と同様の入組対弧文をもっているのである。胴部のふくらみ部に配される文様帯については、一本の横帯文をもっている。茨城県深見新田例¹⁰⁸⁾(図13—7)では、口縁部縄文帯の下端にある一段の文様帯を縦に連なる対弧文が区切っている。鬼越貝塚例の系統として、

鬼越貝塚例(図13—1) → 鬼越貝塚・大貫落神貝塚例(図13—3～4) → 深見新田例(図13—7)

という変遷が考えられるであろう。口縁部縄文帯の下端に二段の横帯文と対弧文をもつ茨城県立木貝塚の深鉢形土器(図13—9)はこの系統の変化の深見新田例に代表される段階以降に大きくみて位置づけられるであろう。文様帯の様相は後出的である。立木貝塚例の口縁部内面にある横走する沈線文はむしろ図12—6～8の加曾利B2式に共通するであろう。この点は編年上の基準として重要と思われる。

鬼越貝塚出土の深鉢形土器と中妻貝塚出土の深鉢形土器(図13—1～2)を比較した場合、中妻貝塚例も先端が鉤状になる沈線(この例では一端だけである)で文様区画がなされていて、胴部の文様帯には二段の横帯文が形成されている。そして、口縁部縄文帯の下端も先端が鉤状になる沈線で区画されている。先端が鉤状になる沈線が全面的に利用されている点では、鬼越貝塚例と中妻貝

塚例とは共通していると言えよう。一方、中妻貝塚例が口縁部縄文帯に明確な文様帯をもたず下端にだけ先端鉤状沈線を施文しているのは、鬼越貝塚例の口縁部縄文帯の下部にある文様帯を省略したためであろう。両例は時期差ではなく、同一段階に於ける文様帯構成の違いという系統差であると考えている。

有名な茨城県椎塚貝塚出土の深鉢形土器¹⁰⁹⁾（図13—5）は、口縁部縄文帯の下端の沈線を区切るように入組対弧文をもっていて、これは鬼越貝塚・大貫落神貝塚例（図13—3～4）がもつ入組対弧文と同じである。異なるのは、椎塚貝塚例ではそれが上下二段になっていない点である。この違いは前段階の様相つまり祖形が異なると思った方がよからう。そのように分析して来ると、椎塚貝塚例のような口縁部縄文帯の下端に入組対弧文をもつ土器の前段階には、中妻貝塚例（図13—2）のような口縁部縄文帯の下端に鉤状沈線をもつ土器を置いて考えた方がよいであろう。口縁部縄文帯の下端の区切り鉤状沈線文が入組弧線文にという変化を鬼越貝塚例（図13—1）と大貫落神貝塚例（図13—4）の場合と共通した流れの中で理解できよう。立木貝塚出土(?)¹¹⁰⁾の深鉢形土器（図13—6）は、椎塚貝塚例と同様に口縁部縄文帯の下端に入組対弧文をもつ土器であり、椎塚貝塚例と同一段階と見なしてさしつかえないであろう。この立木貝塚例では胴部にやや幅広の二段の磨消縄文帯をもち、区切り手法として縦に連なる入組対弧文を施文している。一方、椎塚貝塚例では胴部に一段のやや幅広の横帯文をもち、区切り手法として入組弧線文をもっている。さらに、同一段階で系統を異にする大貫落神貝塚例の胴部にはやや狭い一段の横帯文をもっている。三者それぞれの胴部文様の違いが大きい。恐らく、これらの土器が存在する段階には、胴部文様にかかなりの系統があるのではなかろうかと思う。胴部文様での分類が清楚な理解に達し得ない所以がよくわかる。

加曾利南貝塚の深鉢形土器（図13—8）は口縁部縄文帯の下端には対弧文をもち、胴部ふくらみ部には上下に向い合う弧線文があり、この例では、その間が磨消縄文となっている。そして、その下にやや狭い横帯文があり、弧線文の連結部からこの横帯文まで縦に連なる入組対弧文が区切るように施文されている。この深鉢形土器は、口縁部縄文帯の下端に伴うやや小さめな対弧文から見て、椎塚貝塚・立木貝塚(?)例より後出的で、同じ部位に対弧文をもつ共通性から深見新田例と平行する段階と考えている。つまり、

中妻貝塚例（図13—2）→椎塚貝塚・立木貝塚(?)例（図13—5～6）→加曾利南貝塚例（図13—8）

という別系統の変遷を設定できるであろう。これは、先に示した鬼越貝塚例→鬼越貝塚・大貫落神貝塚例→深見新田例という変遷のそれぞれの段階にほぼ対応するのであろう。

これを前提とした場合、鈴木正博氏によって「中妻系列大森類型小仙塚形式」と呼ばれた深鉢形土器（図13—10）は、加曾利南貝塚例と比較して、対弧文の発達具合から見てそれ以前の連続性の中では理解できないので、型式学的に後出と考えている。また、中妻貝塚の他の二例（「中妻系列椎塚類型中妻形式」図13—11、と「中妻系列余山類型中妻形式」）そして余山貝塚出土の小型で三単位の波状口縁深鉢形土器¹¹¹⁾も、暫定的に設定した「中妻系列」の変遷案の各段階の変化・傾向

に照らして見て、区切り手法や対弧文の様相から、深見新田・加曾利南貝塚段階（図13—7～8）よりも型式学的に後出ではないかと思う。中妻貝塚のこの二例及び余山貝塚の土器は由来する系統も異にしているのではないかと考えている。この点は別の機会に詳述したい。

次に、これら「中妻系列」とされる深鉢形・鉢形土器（「中妻系列大森類型下総形式」は鉢形土器である）がB1式、B2式とどのような対応関係を見い出せるかが問題となるが、手掛りはすでに指摘した。つまり、深見新田例（図13—7）より後出である立木貝塚例（図13—9）は恐らく加曾利B2式であろうと考えるので、深見新田例に平行する加曾利南貝塚例より後出の「中妻系列大森類型」（図13—10）の土器もB2式であることになろう。この土器の主文様が、安孫子氏が設定している3単位の突起を有する深鉢形土器のB2式とも共通することは、意味のあることである。

では加曾利B1式との関係はどうであろうか。筆者なりに再整理した「中妻系列」の古式段階——最古式という意味ではなく、とりあえずそう考えているのであるが——がB1式のどの段階に對比され得るかをまず検討しなければならない。

鬼越貝塚・中妻貝塚例（図13—1・2）は、先端が鉤状になっている沈線文を全面的に用いることにその特色を見い出せることは、すでに説明した。そこで、「中妻系列」のより新しい段階を見て行くなれば、鉤状沈線文を全面的に利用することが、ある程度時期的限定性を有する特徴であると思われる。鬼越貝塚に見られる別器種（図14—1・2）から判断して、加曾利B1式のある段階に平行することは間違いのないであろう。そこで、他の器種で鉤状沈線文を全面的あるいは多用する土器を捜すと、図14—3～5の土器が好例としてあげられるであろう。分布が偏ると思われるが、意味のあることとを考えている。時期的な問題を考える上では、中妻貝塚出土の三単位の突起を有する深鉢形土器（図14—3）と陸平貝塚¹¹²⁾の鉢形土器（図14—5）が重要である。

中妻貝塚例は横帯文にしる単位文にしる、それらを表現するのにすべて先端鉤状の沈線を用いており、鬼越貝塚での在り方を考えた場合、ここの土器インダストリーに加わるべき別形式の深鉢形土器であろう。まず、この中妻貝塚出土の有突起深鉢形土器を鬼越貝塚の問題としている土器群と平行する時期と考えるのは問題ないであろう。陸平貝塚出土の鉢形土器の拓図を見るならば（図14—5）、先端鉤状の沈線によって入組文風な単位文が表現されていて、その下の横帯文には、例えば図10—1に通有な区切り手法を有しているので、陸平貝塚例は図10—1に代表される段階よりも新しくなることはない。そこで、中妻貝塚例と陸平貝塚例の単位文を比較した場合、中妻貝塚例の単位文は鉤状部が絡まず小さいが、陸平貝塚例では鉤状部がからみ単位文が入組文風に大きいのは、中妻貝塚例の方がやや古相を示すとも考えられるであろう。ちなみに、安孫子氏によって加曾利B2式、鈴木氏によって「加曾利B1—2式」と位置付けが変更された有名な陸平貝塚出土の双口土器¹¹³⁾（図14—4）は、単位文から見て、この陸平貝塚の鉢形土器と同時期かと思う。つまり、B2式や「B1—2式」とはならないで山内清男氏の所説に従ってB1式として捉えるべきことがわかる。

以上のように比較してくるならば、鬼越貝塚の「中妻系列」の土器（図13—1）、中妻貝塚の当

縄文時代後期加曾利B式土器の研究 (I)

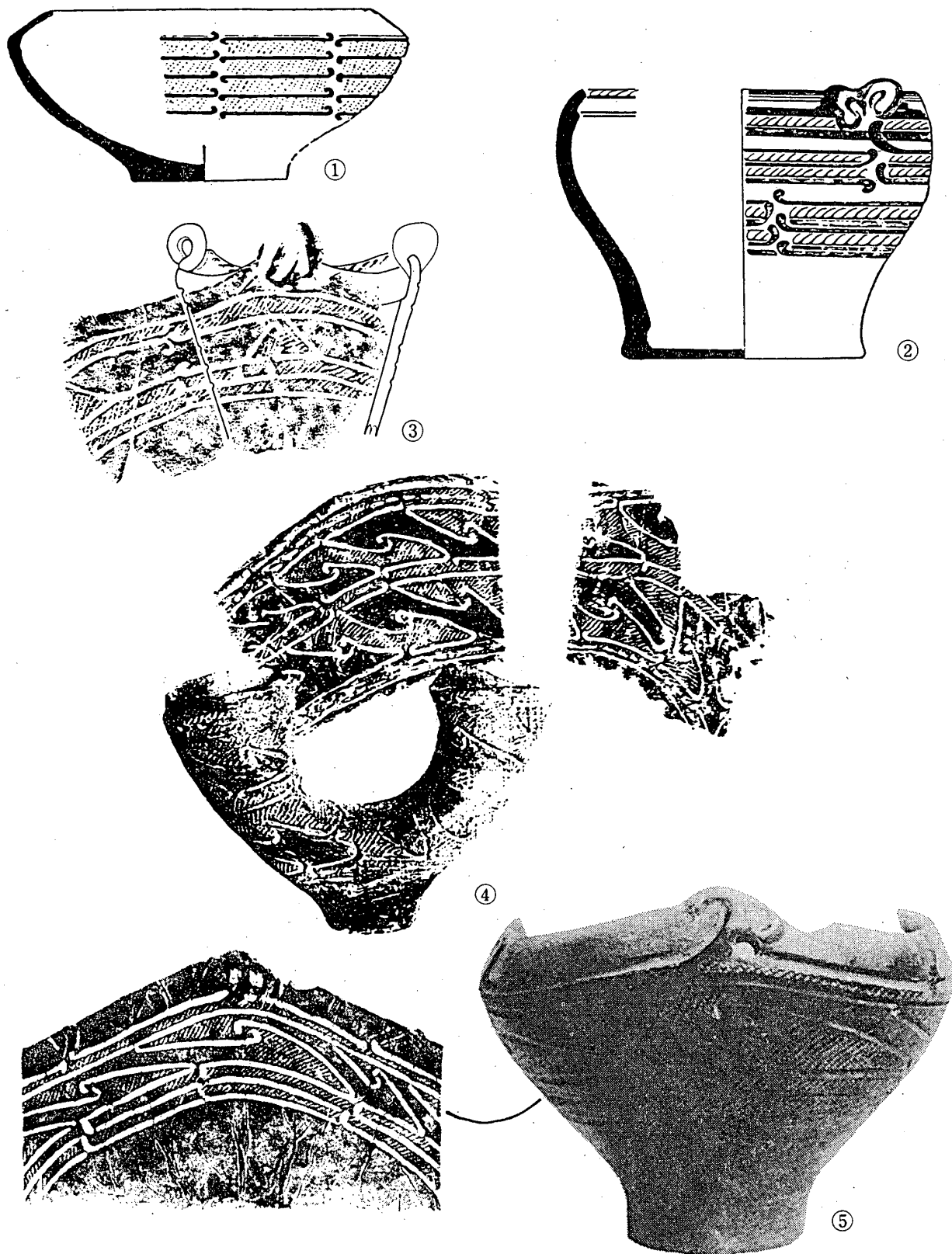


図14 1~2: 鬼越貝塚, 3: 中妻貝塚, 4~5: 陸平貝塚 (縮尺不同)

該土器(図13—2)は図10—1に代表されるB1式の段階より古い西富貝塚第1号住居址床面土器(図12—1～2)に対比すべきかもしれない。両方の土器に似たような沈線文が用いられているのは偶然ではないであろう。中妻貝塚でもそのようなセット関係を示す土器出土地点があったのではなかろうか。ここに「中妻系列」の仮りに古式とした土器の編年上の位置を知るに至ったのである。

もう一つ、中妻系列の編年上の手掛りとなる土器がある。立木貝塚出土の三単位の突起を有する深鉢形土器がそれである¹¹⁴⁾(図15—1)。この土器は口縁部と胴部の文様帯の間がくびれ、その間を突起下から縦に連なる入組対弧文を施文している。胴部文様帯には2段の横帯を区切るように蛇行沈線文が突起下と波底部に対応するところに加えられている。この土器に配される縦に連なる入組対弧文と同じ文様を有する「中妻系列」の土器として、立木貝塚例(?) (図13—6)と後出の加曾利南貝塚例(図13—8)とがあるが、立木貝塚(?)例と同一段階の椎塚貝塚例(図13—5)の胴部横帯文中に配される入組弧線文と比較した場合、立木貝塚の三単位の突起をもつ深鉢形土器の胴部横帯文中に配される蛇行沈線文の方が型式学的に後出的なので、この立木貝塚例は加曾利南貝塚の「中妻系列」の土器と平行する時期のものと考えている。では、次に、三単位の突起を有する立木貝塚の深鉢形土器の時期を決める必要が出てくるのであるが、そのことは、大貫落神貝塚出土の土器¹¹⁵⁾(図15—2)との関係で考えてみたい。

大貫落神貝塚例は、恐らく三単位の突起を有する深鉢形土器であろう。口縁部と胴部の文様帯の間がやはりくびれる器形を呈し、口縁部文様帯に沿って、弧状の帯状文が配されているが、これも加曾利B1式の横帯文の変化に由来するであろう。他の例から考えて、連続的に配されるものである。この文様の連結部から胴部の横帯文へかけて、縦に連なる対弧文が配され、横帯文中にも対弧文が加えられている。器形・文様から見て、今問題にしている立木貝塚の同形式の土器(図15—1)の直後の土器と考えられる。大貫落神貝塚の土器の口縁部横帯文に沿って連続するであろう弧状の帯状文と胴部文様帯に配される「縦連対弧文」手法をもつ横帯文はB2式初頭と考える福田貝塚の土器(図11—5)のそれに対比すべきであると考えている。そのことから、突起の形態も考えて、立木貝塚例をB1式の終末に位置させられるであろう。従って、この立木貝塚例(図15—1)に平行する「中妻系列」の土器(図13—7～8)が、型式連鎖から、B1式終末に比定されるのである。それらの「中妻系列」の土器をB1式終末に比定することは、先に「中妻系列」の土器である立木貝塚例(図13—9)を加曾利B2式に入れて考えるべきと説明したことと矛盾しないであろう。ここに於いて、中妻系列の編年上の位置にほぼ基準を与えられたと思う。それとともに、三単位の突起を有するB2式の深鉢形土器が色々と有りそうなことも予想される。最後に、この点について述べる必要があるが、紙数の都合もあるので簡単に触れておきたい。

ハ. 加曾利B2式の三単位の突起を有する深鉢形土器

大貫落神貝塚の土器(図15—2)に平行する土器として、筆者は、東正院遺跡¹¹⁶⁾の三単位の突起を有する深鉢形土器(図15—3)、先に問題にした福田貝塚の突起を持つ鉢形土器(図11—5)

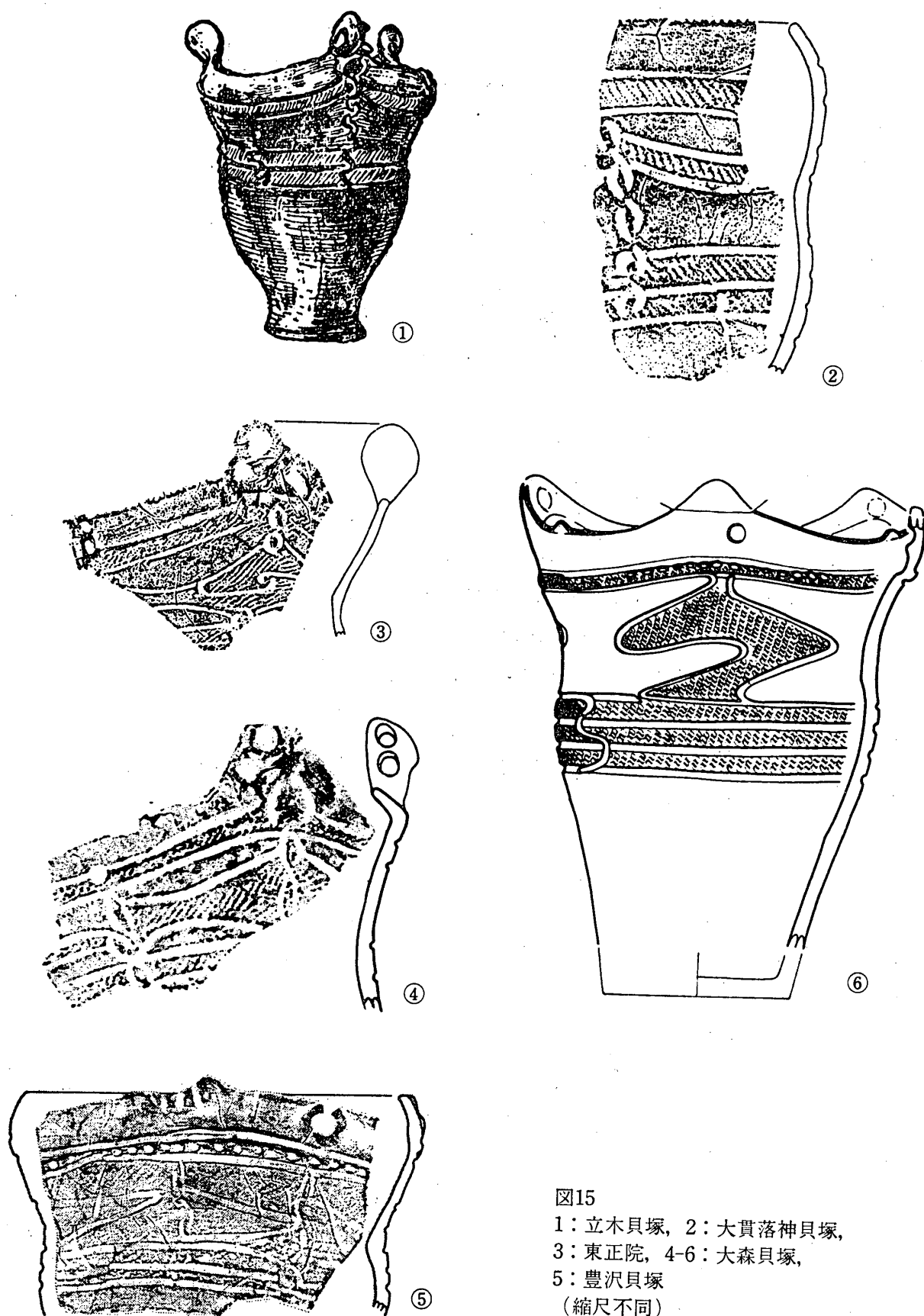


図15
 1: 立木貝塚, 2: 大貫落神貝塚,
 3: 東正院, 4-6: 大森貝塚,
 5: 豊沢貝塚
 (縮尺不同)

を考えている。それぞれ加曾利B1式の横帯文の変化・変容に由来する文様をもち、胴部文様帯に对弧文を伴う横帯文をもち、他にも对弧文を利用するという共通性に着目してのことである。

大森貝塚の三単位の突起を有する深鉢形土器(図15-4)は鈴木正博氏が説くように¹¹⁷⁾、東正院例より後出的であろう。この土器の頸部に展開する各種弧線文のうちで左寄りのところに「入組弧線文」があると同氏によって指摘がなされている¹¹⁸⁾。一方、頸部に展開する文様の系統を異にするが、東京都豊沢貝塚出土の三単位の突起を有する深鉢形土器(図15-5)では、頸部の磨消縄文には口縁部文様帯と胴部文様帯に接するところに入組弧線文に類似した文様があり、胴部には对弧文を伴う横帯文をもっている。大森貝塚例と豊沢貝塚例は近い時期かもしれない。ところで、豊沢貝塚例が有する突起は、突起下部しか現存していないが、「川」の字状の沈線文が残っている。後田貝塚・権現台・大磯小学校例(図2-9, 図6-1~2)などから見て、突起に伴う「川」の字状沈線文は加曾利B2式の文様である。そのことから豊沢貝塚例がB2式と考えられる。

さて、鈴木氏によって「加曾利B1-2式下総系列」の終末とされた大森貝塚の土器¹¹⁹⁾(図15-6)は、筆者の視察では、波頂部のところが同じように欠損している状態及びこの土器の口縁部付近の作り方から、この波頂部のところにある種の突起が附いていたと考えているので、新しい実測図の器形復原の仕方には疑問がある。この土器の胴部文様帯に配される蛇行沈線文は立木貝塚例(図15-1)などに共通するが、両者を比較すれば、明らかに大森貝塚例の方が新しい土器である。この大森貝塚例の頸部に施文される単位文は福田貝塚例(図11-5)、豊沢貝塚例(図15-5)、形式を異にする中沢貝塚例(図11-6)——この土器は実見していないので、何とも言えないが、波頂部の単位を異にし、突起はもたないであろう——より後出的と考えている。大森貝塚例の波底部のところにつく小さな山形状突起は、今比較した諸例にはなく、やはり新しい要素と言えらるであろう。結局は、この土器も突起をもつ加曾利B2式の深鉢形土器の、それも口縁部・頸部・胴部の文様帯を備えた系列に組込まれるのである。

確かに、安孫子昭二氏が着目したように、三単位の突起を有する深鉢形土器は「鋭感的な組列」を形成するのであり、その意味で、この種の土器を細分して考えることは正当であるが、安孫子氏の案では律しきれないより複雑な系列・系統をもっていることが予想出来る。

結 語

安孫子昭二氏や鈴木正博氏の所説は非常に多岐に及んでおり、従って有益な見解を見出す一方、疑問点も多岐に亘ってしまった。しかし、それらについてすべてを一度に論究することは不可能なので、各氏の所説に触れたところで、加曾利B2式あるいは加曾利B3式について、筆者との基本的な相違点と筆者の考え方を示しておき、専ら議論を加曾利B1式に集中したのである。それと言うのも、加曾利B式全体の理解の基本となる加曾利B1式について、安孫子氏の場合、山内清男氏のB1式の一部をB2式に変更し、鈴木氏の場合、山内氏のB1式を「B1式」・「B1-2式」と二分したとすることに対する当否を問題にしたかったからである。

結果的に考えて、安孫子氏が新たにB2式とした土器はやはり山内氏のB1式に従うべきであること、鈴木氏の「B1—2式」は、本来B1式とB2式に分けられるものであることを確認するに至った。

そのような筆者なりの認識を得る過程で、重要かと思われることがいくつかある。一つは、B1式の横帯文、単位文、区切り手法が実に多様な変化過程あるいは変容様式を有しているとさらに予想されることである。B2式に伴う各種磨消縄文のいくつかは、そのB1式文様の変容の所産であることがわかった。今後も、B2式の磨消縄文のうちで、どれがB1式からの連続で理解し得るのか、どれが他地方との連関の中で分析しなければならないのかを念頭に置いてB1・B2式の細分や地域的関係の把握を進めなければならないであろう。そうした作業は、東北・北陸・北海道方面の後期中葉とされる諸型式の整備にも有効な視座を提供してくれるであろう。いずれ具体的に論じる機会があると思う。

もう一つは、「中妻系列」とされる土器群を究明する上で、理解の出発となるのは鬼越貝塚であろうということである。鬼越貝塚の資料に接することで、「中妻系列」とされる土器が当地方に於ける加曾利B1式土器インダストリー上のセットを構成する安定した一つの器種として存在していることがわかる。いつごろからこのようなセットが始まりどのように変化していくのかを追求することで、B2式に移行する「中妻系列」の意味が理解されるのではなかろうかと思う。鬼越貝塚の「中妻系列」の土器より古いと思われる土器が中妻貝塚にはあり、B1式をより遡って行くものと思う。その場合、堀之内2式との接続如何が問題となろう。堀之内2式のセットを構成する器種を考えると、頸部で一度くびれ、そのくびれ部より下の胴部に文様帯をもつ土器があることが意味をもつかもされない。この種の深鉢形土器はほぼ全面に縄文を施すことが多く、かつ、堀之内2式の一つの特徴である横走る隆線や「8」の字状貼付文とは親和関係が消極的なのである。中妻系列はこの器種との系譜関係の有無を一応考える必要があろうかとも筆者は考えている。と言うのも、「堀之内式から安行式までの諸型式は間隙型式の挿入を許さぬ程連続的発達認められる¹²⁰⁾」という山内氏の認識が重要に思われてならないからである。ともあれ、「中妻系列」として集められた深鉢・鉢形土器群の加曾利B式上の位置付けはなお検討を要するのである。

さらにもう一つは、B2式の三単位の突起を有する深鉢形土器が安孫子氏が言うような一つの系列ではないということが判明した点である。この種の深鉢形土器は文様や文様帯に於いていくつかに細別し得ることがわかったのである。従って、学史的意義とは別に、安孫子氏の既成方針ではやはり加曾利B式の内容を全関東的には律しきれないのではなかろうかと思う。

結局、痛感したのは、『日本先史土器図譜』での加曾利B式の「古い部分、中位の部分、新しい部分」という型式細分と型式内容及び提示された標本土器の今日的有効性である。1930年代は縄文式土器研究及び弥生式土器研究¹²¹⁾の発達に於いて重要な年代であるが、その間に登場してきた、縄文式・弥生式土器を掲載する『日本先史土器図譜』の perspective は改めて論じなければならないであろう。それを踏えた研究史的照射と今日的縄文式土器研究課題の模索との交差に、本邦の先

史考古学研究の進むべき一つの方向があるのではないかと私考する次第である。

論ずべき問題は尽きないが、以上で今回の分は擱筆する。(未完)

本稿を草するに際して、東京大学文学部考古学研究室、東京大学総合研究資料館人類先史部門、京都大学文学部考古学研究室の諸機関のご好意により関連資料の調査の機会を得られたこと、そして、上野佳也、藤本 強、重松和男、赤沢 威、安斎正人、今村啓爾、鷹野光行、米田耕之助、篠原 正、斉藤 隆、小川静夫、新井和之、河野一也、家根祥多、西田泰民、近藤 敏、玉田芳英、新屋雅明、中野修秀、菅谷通保の諸先生・諸先輩・諸氏には色々とお世話になったことを記して感謝の意を表したい。(1983, 3, 10)

註

- 1) 安孫子昭二 1982 「加曾利B式とその細分」, 『土器解説』『縄文土器大成』第3巻(後期), 講談社
 鈴木正博・鈴木加津子 1979 「中妻貝塚論序説」『取手と先史文化』上巻, 取手市教育委員会
 鈴木正博 1980 「大森貝塚出土の土器・石器」, 「加曾利B 1式精製土器様式(概説)」, 「加曾利B 1—2式精製土器様式(概説)」, 「加曾利B 2式精製土器様式(概説)」, 「加曾利B 3式精製土器様式(概説)」, 「加曾利B式粗製土器様式(概説)」『大田区史(資料編)考古Ⅱ』, 東京都大田区
 — 1981 「遺物特論Ⅱ——「加曾利B式(古)」研究序説——」『取手と先史文化』下巻, 取手市教育委員会
 加曾利B式の記述に際しての用語法について鈴木氏の考案が便利なので、それに従った部分があることを明記しておく。
- 2) 八幡一郎 1924 「千葉県加曾利貝塚の発掘」人類学雑誌39—4・5・6
- 3) 山内清男 1928 「下総上本郷貝塚」人類学雑誌43—10
- 4) 山内清男 1937 「縄紋土器型式の細別と大別」先史考古学1—1, 先史考古学会, 30頁
- 5) 註(4)文献, 30頁
- 6) 山内清男 1932 「日本遠古之文化——縄紋土器文化の真相」ドルメン1—4
 次の一文がとりわけ重要である。「概観すると、各地方に似た型式が、似た順序に相継いで居る様である。これは縄紋土器の時代に於いて、各地の交渉が活発であって、一地方に生じた変遷が次の地方に受入れられ、土器型式の変遷は在来の土器の伝統及び多少の変遷と、新しく他地方から来た影響との二者から成立することが多かったためであろう。」(43頁)
- 7) 山内清男 1939 『日本先史土器図譜』第Ⅲ集, 先史考古学会
- 8) 山内清男 1964 a 『日本原始美術』I, 講談社
 — 1964 b 「縄紋式研究史における茨城県遺跡の役割」茨城県史研究4
 — 1969 「縄紋草創期の諸問題」MUSEUM No. 224
- 9) 鈴木保彦 1976 「環礫方形配石遺構の研究」考古学雑誌62—1
 — 1980 「関東・中部地方を中心とする配石墓の研究」神奈川考古9
- 10) 以下、『日本先史土器図譜』からの引用はすべて再版による。
 山内清男 1967 『日本先史土器図譜』(再版), 先史考古学会
- 11) 註(3)文献, 464頁
- 12) 註(8)1964 a 文献, 184頁
- 13) 山内清男 1935 「縄紋式文化」ドルメン4—6, 493頁下段—494頁上段
- 14) 註(13)文献, 494頁上段

縄文時代後期加曾利B式土器の研究（I）

- 15) 註10文献, 12頁
- 16) 註13文献, 494頁上段
- 17) 註13文献, 494頁下段
- 18) 註13文献, 494頁下段
- 19) 山内清男 1929 「文献 J. Nakaya: A Study of the Stone Age Remains of Japan I, Classification and Distribution of Vases with Spouts」史前学雑誌1—3, 91頁
- 20) 註13文献, 449頁下段
- 21) 註10文献, 12頁
- 22) 註(8)1964 a 文献, 184頁
- 23) 杉山寿栄男 1976 『日本原始工芸』(復刻版), 北海道出版企画センター(原著初版1928年)
- 24) 大塚広住 1973 「千葉県松戸市二ツ木後田貝塚出土の縄文式土器」大塚考古11, 大塚考古学会
- 25) 註(8)1964 b 文献, 3頁
- 26) この土器については鈴木正博氏も注目している。
註(1)鈴木1980文献, 237頁
- 27) 池上啓介 1937 「千葉県印旛郡臼井町遠部石器時代遺跡の遺物」史前学雑誌9—4
報文では図1—2の土器の上下が逆になっている。
- 28) 天野 努他 1981 「Loc. 39 遺跡」『公津原』, 千葉県文化財センター
- 29) 註10文献, 12頁
- 30) 芹沢長介 1958 「縄文土器」『世界陶磁全集』1日本古代篇(再版), 河出書房新社, では加曾利B式として取り上げられている。
- 31) 米田耕之助・鷹野光行他 1977 『西広貝塚』, 上総国分寺台遺跡調査団
西広貝塚では加曾利B3式や曾谷式の良好なまとまりを示す地点がいくつかある。
- 32) 池上啓介 1933 「広畑貝塚」史前学雑誌5—5
- 33) E. S. Morse. 1879 Shell Mounds of Omori, Memoirs of the Science Department, University of Tokyo, Japan. Vol. I part I のPlate IVに載っている実測図は口縁部のところがやや不鮮明であるが, 実物には二段になる刻文帯が口縁部に配されている。
- 34) 註(1)安孫子文献
- 35) 安孫子昭二 1971 「加曾利B式土器の変遷」『平尾遺跡調査報告』I, 平尾遺跡調査会
- 36) 坪井正五郎 1893 「西ヶ原貝塚探究報告 其二」東京人類学会雑誌8—89
—— 1896 「異地方発見の類似土器」東洋学芸雑誌No.175
沼田頼輔 1898 「把手の分類 第二章 大森式」東京人類学会雑誌13—146
- 37) 註(3)安孫子文献, 225頁
- 38) 註(1)安孫子文献, 177頁
- 39) 鈴木保彦 1977 『下北原遺跡』, 神奈川県教育委員会
- 40) 註(1)安孫子文献, 150頁
- 41) 註(3)文献
- 42) 註(1)鈴木1980文献
- 43) 米田耕之助・小川静夫 1981 「西広貝塚第二次調査」『上総国分寺台発掘調査概報』, 上総国分寺台遺跡調査団
- 44) 註(4)文献, 58頁
- 45) 杉山寿栄男 1921 『縄紋土器』, 日東書院
- 46) 鈴木一男他 1976 『大磯小学校遺跡』, 大磯町教育委員会
- 47) 新屋雅明他 1982 『豊沢貝塚』, 渋谷区教育委員会
- 48) 註(1)安孫子文献, 178頁

- 49) 新津 健他 1978 『八祖遺跡』, 八祖遺跡調査団
- 50) 註(1)鈴木1980文献
- 51) 堀越正行 1978 『曾谷貝塚E地点発掘調査概報』, 市川市教育委員会
- 52) 八幡一郎編 1972 『千代田遺跡』, 四街道千代田遺跡調査会
- 53) 註(4)文献, 第8図SS1区N204 遺構出土土器参照。
- 54) 少し必要な限りに於いて安行式に触れておく。筆者は、安行1式の波状口縁深鉢形土器については、ある種の平縁深鉢形土器(古段階の例: 註(5)文献, 第63図—3, 註(1)鈴木1979文献, 第101図—16)の頸部文様帯からの影響で胴部くびれ部付近にある刺突列の上に文様帯が登場する段階(西広貝塚No.204大形ピット出土一括資料に註(10)文献図版63岩井貝塚の安行1式平縁深鉢形土器を補って見ればよくわかる)とそれ以前とに分け、新たに口縁部文様帯の帯縄文と結合して三角形区画が登場する段階を弁別し、古・中・新段階とし、実際はさらに各段階を数段階に細分して考えている。埼玉県小深作例(図7—12)は、口縁部とくに波頂部付近に安行1式新段階終末からの移行をよく物語る「痕跡的な帯縄文」(もっとも隆帯上は刻文になっているが)をもち、安行2式の初頭と考えている。今度は胴部文様帯に平口縁深鉢形土器の影響を受ける(図7—11)。広畑貝塚にはこの直後の2式の良好な資料があるが、その後、胴部のくびれ部付近に伝統的にあった刺突列がなくなるのと歩調をあわずかのように各種文様帯構造をもつ土器(より「保守的」なものからより他地域と「親和的」なもの)が出現し、それぞれ系統的に変遷していくことで晩期に移行して行くのである。例えば、広畑貝塚、立木貝塚、西広貝塚、貝の花貝塚、石神貝塚、真福寺貝塚、湯島切通貝塚、下沼部貝塚、高井東、奈良瀬戸、東北原、姥山Z地点、千網谷戸、板倉沼等の資料をあわせれば安行2式から安行3a, 3b式に至るこの器種の変化、変容がよくわかる。その間にも、他地域及び他器種との影響関係がある。この場合、後期と晩期の区別は、現状では雅楽谷例(小林達雄1978『縄文土器』, 至文堂, 26図)に求めるのが相応しいかと思う。つまり、胴部に見られる文様帯と文様から、この雅楽谷例を安行3a式初頭と考えているのである。学史的に有名な立木Ⅲ式は単一時期ではない。さらに変化を追っていくならば、正系、傍系を含めこの趣の土器の変容・終焉は安行3c式と考えている。
- 大塚達朗 1979a 「安行式土器をめぐる I——成立に関する予案」考古学研究ノート(東京大学文学部考古学研究室)
- 1979b 東京大学大学院人文科学研究科修士学位論文「安行式土器の研究——編年学的再検討——」, 未刊
- 1980 「1979年の歴史学界——回顧と展望——日本考古二」史学雑誌89—5
- 1981 「小豆沢出土安行3a式深鉢再考——三叉紋の系譜から」彌生No.11(東京大学文学部考古学研究室談話会)
- 55) 千代田Ⅳ区5号住居址に、問題にしている土器が伴出している(註(5)文献, 第53図—4)。
- 56) 註(4)文献では「関東薄手式」の仲間として取り上げられていて、「高五寸一分、口径五寸五分」で「大口甕形の小品」とのみ記されている(8頁下段)。
- 57) 註(1)鈴木1979文献
- 58) 註(1)鈴木1981文献, 76頁
- 59) 鎌ヶ谷市史編さん委員会 1982 『鎌ヶ谷市史』上巻, 鎌ヶ谷市
- 60) 宮崎朝雄他 1976 『黒谷田端前遺跡』, 岩槻市遺跡調査会
- 61) 鷹野光行・米田耕之助・小川静夫 1978 『祇園原貝塚』, 上総国分寺台発掘調査団, 第25図—1
- 62) 註(5)文献, 58頁
- 63) ちなみに、千代田例(図7—11)に有るジグザグ状磨消縄文は、後に蛇行垂線文と組み合い晩期へと展開していく。この文様も論ずべき点が多く、千代田例の意義は大きいと言わねばならない。
- 64) 註(1)文献, 179頁

縄文時代後期加曾利B式土器の研究 (I)

65) 註(1)鈴木1980文献, 163頁—164頁

66) 註(1)鈴木1980文献, 199頁—202頁

67) 註(1)鈴木1979文献, 39頁

68) 註(1)鈴木1980文献, 199頁

69) 註(1)鈴木1981文献, 38頁—39頁

70) 註(2)文献, 255頁

71) 註(1)鈴木1980文献, 291頁

72) 鈴木正博 1980 『『曾谷式』研究序説』『古代探叢』, 早稲田大学出版部, 82頁

学史的に曾谷式平行とされる十腰Ⅳ内式ではなく、その前の十腰Ⅲ式に伴う「複段連続刻目手法」については、手元にある文献では、青森県中宇田、同神明町、同高長根山などの遺跡で報告されている(1974『今別町浜名遺跡・中宇田遺跡・西田遺跡・五郎兵衛山遺跡・五所川原市原子溜池遺跡群発掘調査報告書』, 青森県教育委員会; 1980『金木町神明町遺跡』, 青森県教育委員会; 1981『高長根山遺跡』, 弘前市教育委員会)。ただし、東北方面での文献渉猟を怠っているのも、どの程度時期的に遡上するのかがご教示いただきたい。北海道方面では、鷹野光行氏により体系的に整備された後期中葉の編年での鮎澗式に同趣の手法が遡上する(1978「北海道における縄文時代後期中葉の土器の編年について」考古学雑誌63—4; 鷹野氏は鮎澗式を加曾利B2式平行と考えている)。関東方面では、公津原 Loc. 39 (八代玉作) 遺跡出土の2段の刻文帯を口縁部にもつB2式土器(図2—5)と、鈴木氏が曾谷1式に比定する陸平貝塚の「瓢あるいは浅鉢と考えられる」土器(註(1)鈴木1981文献, 第61挿)が、口縁部の2段の刻文帯と磨消縄文のモチーフに於いて極似するのは「他人の空似」であろうか。ともあれ、「複段連続刻目手法」の時期的限定性は疑わしい。そのことは、鈴木氏自身が「大森貝塚例(図1—6)」で証明している。従って、鈴木氏の考案になる「曾谷1式広畑系列」は再考の余地が十分にあると言わざるを得ない。

73) 註(1)鈴木1980文献, 32頁

74) 註(1)鈴木1981文献, 35頁

75) 註(1)鈴木1979文献, 31頁

76) 註(1)鈴木1979文献, 38頁

77) 註(1)鈴木1979文献, 39頁

78) 次のような当業者による二通りの見解に接する時、その感を強くせざるを得ない。

A: 「宮内は1973年以来、中妻貝塚の整理に参加して、多量の縄紋式後・晩期の資料に学ぶ機会があった。1979年にはモースによる大森貝塚の実物に接する機会が与えられた。もとより、いずれも詳細な層序関係はあきらかではなく、また発掘調査によって得られる感触すら持たない資料である。」(宮内良隆 1980 第4回茨城県考古学研究発表会要旨「安行1式土器について」53頁)

B: 「我々はこれまで茨城県の晩期遺蹟の研究(略)を進めてきたが、層位学的に解決し得たのは、現状では中妻貝塚に於ける安行2式と3a式との分離と、神明貝塚に於ける安行3c式期各種系列の一括出土の確認である。」(鈴木正博・鈴木加津子 1981 第5回茨城県考古学研究発表会要旨「安行3b式研究に於ける茨城県遺蹟の役割」32頁)

79) 註(1)鈴木1980文献, 163頁—164頁

80) 註(1)鈴木1980文献, 163頁

註(1)鈴木1981文献, 8頁, 28頁—33頁

81) 註(2)文献

82) 註(1)鈴木1980文献, 18頁

83) 杉山寿栄男 1932 『日本原始繊維工芸史』原始篇, 雄山閣

84) 註(1)鈴木1981文献, 18頁

85) 中村恵次・斎木 勝 1977 『千葉市中野僧御堂遺跡』, 千葉県文化財センター

大塚達朗

- 86) 服部清道・寺田兼方 1964 『西富貝塚発掘調査報告』, 藤沢市教育委員会
- 87) 市川 修他 1974 『高井東遺跡』埼玉県教育委員会
- 88) 吉田 格 1956 「各地域の縄文式土器 関東」『日本考古学講座』3, 河出書房
- 89) 本田 勉他 1981 『神野向遺跡Ⅰ』, 鹿島町教育委員会
- 90) 註23文献では武蔵大森となっているが, 東京大学総合研究資料館人類先史部門で註記を確認したところ, 西ヶ原貝塚となっている。
- 91) 藤本弥城 1980 「大貫落神貝塚」『那珂川下流の石器時代研究』Ⅱ
- 92) 折原 繁他 1978 『千葉市築地台貝塚・平山古墳』, 千葉県文化財センター
- 93) 五木田大樹・鈴木加津子・鈴木正博 1979 「先史時代の水海道(Ⅰ)——金土貝塚資料編(1)」常総台地
- 11
- 94) 鈴木敏昭他 1980 『足利遺跡』, 久喜市教育委員会
- 95) 安孫子昭二他 1970 『神明貝塚』, 庄和町教育委員会
- 96) 註23文献
- 97) 杉山寿栄男 1978 『原始文様集』(復刻), 北海道出版企画センター(原著出版, 1923年)
- 98) 江坂輝弥 1966 「縄文時代の文様」『日本の美術の誕生』, 平凡社
- 99) 註23文献
- 100) 下津谷達男他 1965 『中沢貝塚』, 鎌ヶ谷町史編纂委員会
- 101) 杉原荘介編 1976 『加曾利南貝塚』, 中央公論美術出版
- 102) 関根孝夫他 1973 『貝の花貝塚』, 松戸市教育委員会
- 103) 註47文献, 49頁, 第33図—2
- 104) 註(1)鈴木1981文献, 93頁, 第199図—1
- 105) 註(1)鈴木1981文献, 38頁
- 106) 註(1)鈴木1981文献, 38頁
- 107) 慶応義塾高等学校考古学会 1955 「茨城県行方郡津澄村繁昌鬼越貝塚発掘報告」Archaeology 22
- 108) 茨城県史編集委員会 1979 『茨城県史 考古資料編 先土器・縄文時代』, 茨城県
- 109) 註(108)文献
- 110) この土器は, 甲野 勇氏によって図15—1の土器とともに加曾利B式として扱われている(甲野 勇 1947 『図解先史考古学入門』, 山岡書店, 117頁)。既に探究の手がのぼされていたのを知るのであるが, 遺跡名については甲野氏の著作には明記されていない。しかし, 東京大学総合研究資料館人類先史部門の記録を調べると, 他の立木貝塚の図15—1の土器(底部付近の外面に立木と註記がある)及び註23文献, 第百三図版—1の立木貝塚の土器と一括して記録されているので, 直接註記を確認していないが, 立木貝塚出土の可能性が強いと思う。
- 111) 註23文献
- 112) 註23文献
- 113) 註90文献
- 114) 註(109)参照
- 115) 註91文献
- 116) 鈴木保彦 1972 『東正院遺跡調査報告』, 神奈川県教育委員会
- 117) 註(1)鈴木1980文献, 206頁
- 118) 註(1)鈴木1980文献, 206頁
- 119) 註(1)鈴木1981文献, 39頁
- 120) 山内清男 1932 「下野国河内郡本村野沢の土器」史前学雑誌4—1, 15頁
- 121) 1939年, 森本六爾・小林行雄両氏によって, 『弥生土器聚成図録』正編が刊行されるが, 抛るべき編年

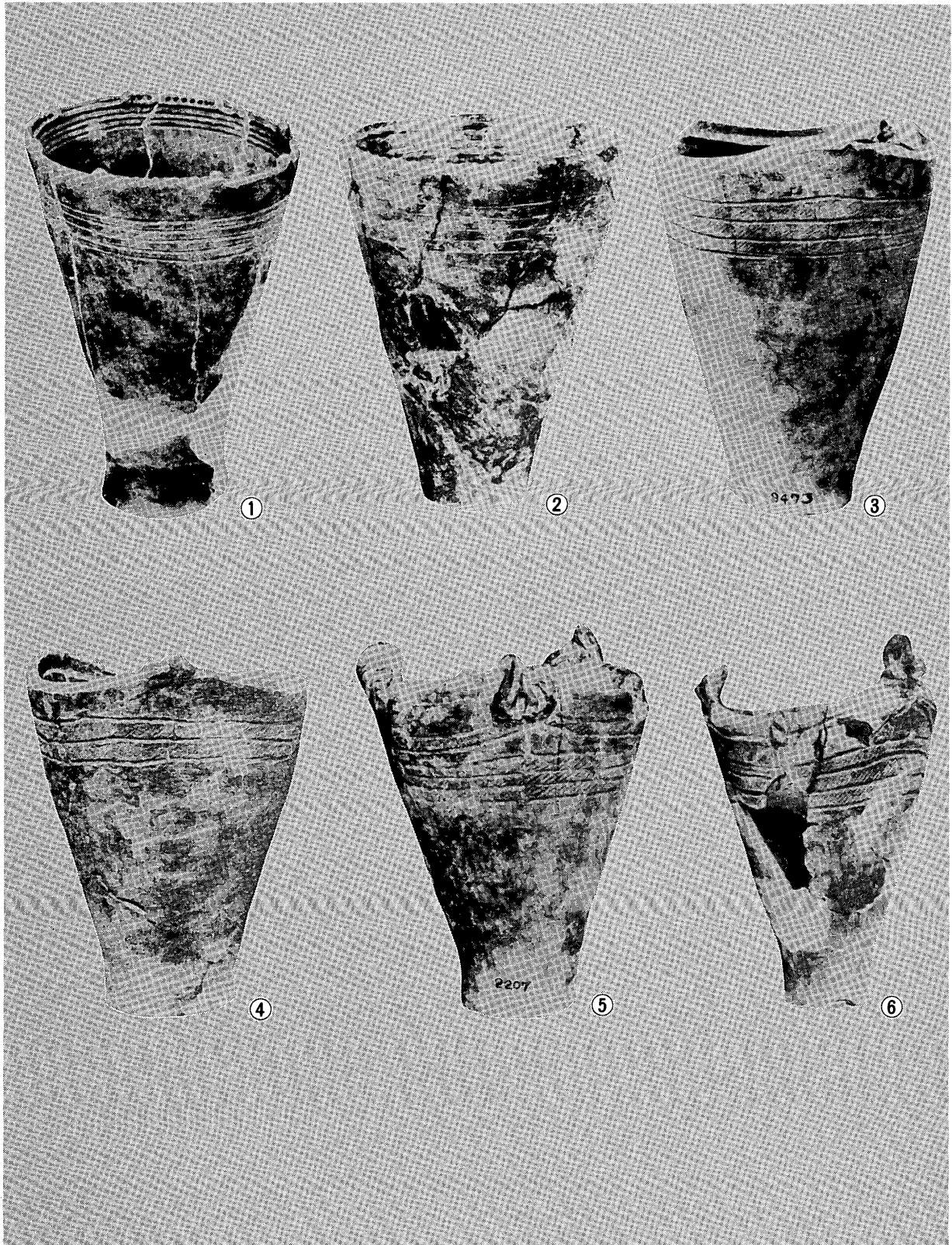
縄文時代後期加曾利B式土器の研究（I）

研究の一応の完成は、1943年の『大和唐古弥生式遺跡の研究』に於ける小林行雄氏による畿内第I～V様式編年を待たねばならない。それに至る間に、小林氏は弥生式土器、弥生文化研究に重要な論攷（1933「先史考古学に於ける様式問題」考古学4—8；1935「弥生式土器の様式構造」考古学評論1—2；1938「弥生式文化」『日本文化史大系』1など）を著している。

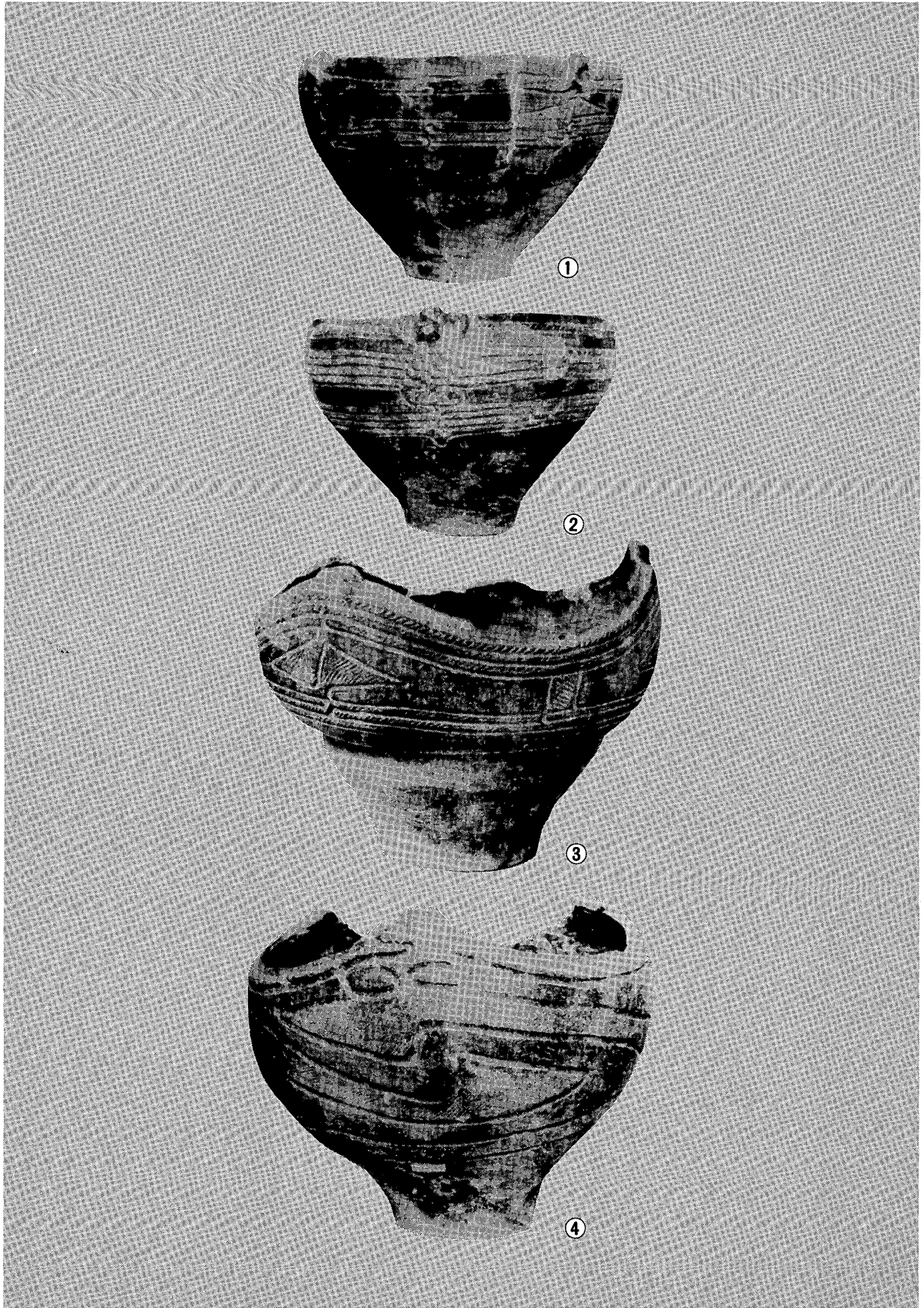
最近の畿内の弥生式土器研究を傍観していると、第I～V様式について、石野博信、井藤暁子、都出比呂志、寺沢 薫、森岡秀人、森田克行の諸氏によって、ある場合は細分を進行する立場から、別の場合には再検討を喚起する立場から、様々な考案及び議論、さらには相互批判が続出しているようである。「様式論」の評価ともからんで今後の動向が注目される。

図・図版・表の出典

- 図1—1：1892 「赤塗り土器の図版」東京人類学会雑誌15—172 同2：註32文献 同3・6：註33文献
同4：註23文献 同5：註30文献
- 図2：註24文献
- 図3：註28文献
- 図4：註31文献
- 図5—1：註(1)鈴木1980文献 同2：註33文献 同3：註43文献 同8～9，24～26・48：註(1)安孫子文献
- 図6—1：註45文献 同2：註46文献 同3：註47文献
- 図7—1：註(1)鈴木1980文献 同2：註51文献 同3：註52文献 同4：註60文献 同5：註59文献 同6
～7：註(1)鈴木1979文献 同8：註45文献 同9～10：註43文献 同11：註52文献 同12：立木新一郎
他 1971 『小深作遺跡』，大宮市教育委員会
- 図8：註(9)鈴木1980文献，（一部手を加えた）
- 図9—1：註(1)鈴木1980文献 同2・8：註(1)鈴木1981文献 同3：註23文献 同4：註 83 文献 同5：註
52文献 同6：註23文献 同7：註88文献 同9：註67文献 同10：註85文献 同11：註89文献
- 図10—1・4・6：註85文献 同2：註(1)鈴木1980文献 同3：註82文献 同5：註81文献 同7～8・11～
12：註(1)鈴木1981文献 同9：註94文献 同10：註93文献 同13：註95文献
- 図11—1：註97文献 同2：註86文献 同3：註98文献 同4～5：註23文献 同6：註(100)文献
- 図12—1～4：註86文献 同5：大井晴男 1966 『野外考古学』，東京大学出版会 同6：註(1)鈴木1981文
献 同7：註(102)文献 同8：註(101)文献
- 図13—1・3：註(107)文献 同2・9～11：註(1)鈴木 1981 文献 同4：註91文献 同5・7：註(108)文献
同6：註(110)文献 同8：註(101)文献
- 図14—1～2：註(107)文献 同3：註(1)鈴木1981文献 同4：註97文献 同5：註23文献
- 図15—1 註(110)文献 同2：註91文献 同3：註(116)文献 同4・6：註(1)鈴木 1980 文献 同5：註47
文献
- 図版I～II 註40文献
- 表1 註(1)鈴木1980文献



1 : 高田貝塚 2 : 矢作貝塚 3 : 権現台貝塚 4 : 廻戸貝塚 5 : 椎塚 6 : 中妻貝塚



1 : 中妻貝塚 2 ~ 3 : 福田貝塚 4 : 廻戸貝塚